ライフデザイン

杉　直夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライフデザイン

【Ｎコード】
Ｎ８３９１Ｔ

【作者名】
杉　直夫

【あらすじ】
タイトルは
ライフデザイン（人生設計）
でも生命保険のＣＭではありません。
恋愛小説のようでもあるが、そうでもない。
主人公の「英輔」は一体何者なのか？
「人生を自由自在に生きている」と周りから言われる英輔にも大きな悩みがあった。
私たちは自分の人生をどのように生きたら良いのだろう？

アイデンティティを確立しようなんていう言葉も最近は頻繁に聞かれるようになりましたが・・
では「アイデンティティってなぁに？」とか
そもそも「己」とは何ぞや？などなど
そういったことも含めてライフデザインではないのか？と私は考えているのです。
又
会社ってなぁに？とか人事について・・などなど
そういった観点も、この小説にはあります。
英輔の人生は一体どうなっていくのか？？？

第一章（書き出し）（前書き）

ライフデザインとは「人生設計」のこと
生命保険等では割と耳馴染みの言葉ですね。生保の勧誘員のことをライフデザイナーと呼んでいる会社もあるくらいです。
何歳で結婚して子供は何人？とか万一のために保険に入る。とかそういうことばかりが人生設計ではありません。
誤解のないように申し上げておきますが、生命保険に入るな。という意味ではありません。
万一の備えは大事な事ですから私も生命保険は加入しています。
そうではなくて、私は「こういう人になりたい。」とかという願望が皆さん、それぞれあるだろうと思います。
「自分らしくありたい。」という思いも勿論ありますね。
さて自分らしく？ってどういう人生だろう？と考えた事はありますか？
自分はこういう人間だ。と思っていても周りの者はそう考えていない。
自己と他者の評価のギャップに悩むという事がシバシバあるのではないでしょうか？
それは何故でしょうかね。
そういったギャップや周りの期待に過度に応えようと頑張ったりすることが心を病む原因になったりしているといわれています。
アイデンティティを確立しようなんていう言葉も最近は頻繁に聞かれるようになりました。
では「アイデンティティってなぁに？」とか
そもそも「己」とは何ぞや？などなど
そういったことも含めてライフデザインではないのか？と私は考えているのです。
登場人物の職場での出来事や恋愛を通じて「アイデンティティって

なぁに」などを考えていこうと思っています。
カテゴリーは恋愛小説ということになっていますが、恋愛に関しては
はあまり書き込めていません??
会社ってなぁに?とか人事について・・などなど
そういった観点から読み進めて頂いたほうがより楽しめそうです。

第一章（書き出し）

ライフデザイン

第1章

「英輔は私と結婚するんだからぁ！！」幸都恵はあらん限りの声で叫んだ。
それはあまりに唐突だった。英輔は全身に電気が走ったようになり反射的に飛び上がった。そして一瞬だが体が固まった。‘わずかの間にもう2回目だ。’と思った。
先に洋子が幸都恵を見つめた。英輔は少し遅れて振り返ると、その視界に幸都恵を捕らえた。
先ほどの場所からは2～３０メートルはあったはずだが幸都恵はもう英輔の直ぐ後ろまで
近づいていた。
幸都恵の瞳からは大粒の涙がこぼれて一筋頬を伝ったように英輔には見えた。英輔の心のスクリーンには「英輔と結婚する」と泣きじゃくる幸都恵の姿があった。‘どこかでこの瞬間を体験したのだろうか？夢か？現実か？英輔は何がなんだか分からなくてパニック寸前だった。今の出来事が全く理解できないまま視線を左隣に移し洋子の顔を見た。
英輔だけではない三者三様それぞれパニックだった。洋子もそうだ。
英輔の顔など見て
おらず幸都恵の方に視線を向けたまま「だれ・・？」そうつぶやくのが精一杯だった。
つい今さっき英輔に声をかけた時は後姿だったのでさほど気に留めていなかったが、英

輔がまさか女性と同伴でこの場に現れるとは想像していなかった。
一体今何が自身の目の前で起こっているのか??思考停止だった。
英輔は洋子のその言葉を聞いて我に返った。とたんに耳まで真っ赤になった。
あまりに唐突な幸都恵からのプロポーズ?の言葉をとても大きな声で聞いてしまい、なんとも表現できない心中だった。恥ずかしい姿を他人に見られたような気持ち悪い状態に陥った。
多分ズボンのチャックが開いているのを見知らぬ女性から指摘された時、このような心境になるのではないだろうか?
直ぐにこの場を繕おうとしたが真っ赤になった顔がそう簡単にもとに戻るわけもなかった。
「あはは・・いやぁ・・あのぅ・・えーと・・・。そう石野。石野幸都恵さんって言うんだ。オレの会社の後輩でね・・」英輔はしどろもどろ答えた。どこへ視線を向けたら良いのか英輔の視線は定まらなかった。
その時、幸都恵は呆然と立ち尽くしたまま何故こんな事を言ってしまったのだろう?と自問していた。

それはほんの少し前のこと・・・
今日はヨットを体験してみたい。という幸都恵の希望を叶えるために、英輔の友人の川島雄三夫妻のいる神奈川の海まで長野県からやって来た。
午前中に夫の雄三からヨットの基本操作などの講義を受け、その後昼食を済ませ、正に海に出る準備を整えたところだった。
「色々ありがとうございました。」幸都恵は深く頭をさげた。
「じゃぁ気をつけて・・そして楽しんでらっしゃい。」雄三は笑顔

を浮かべながら幸都恵に返し、英輔に顔を向けると言った。
「本当に久しぶりなんだからな。気をつけて行けよ。今日の風ならそれほど心配はいらないけどな。」
「ああ分かってるよ。本当色々すまんな・・じゃぁ行ってくるわ。」
そう言うと、英輔は幸都恵の腰に左手を添えると軽く押すようにしながら誘ない桟橋の方へ歩き出した。
英輔は幸都恵の腰の柔らかい感触を楽しんだ。
‘もうこの年になると若い女性の体に触れる機会などは風俗店にでも行かない限り滅多に無い。’と考えた。
幸都恵の肉付きは英輔の想像よりも良かった。英輔くらいになれば大体感触でわかる。その手でぎゅっと自分の方に引き寄せたい衝動に駆られた。周りに誰もいなければ幸都恵をその場に押し倒したいくらいだった。‘しかしあまり力を入れ過ぎて警戒心を抱かれ避けられてもいけないから力加減が難しいな・・’など勝手にイメージを膨らませていたら血流が股間に集まりだした。その時・・・
「英輔くぅん」と女性の呼ぶ声がした。英輔は瞬間全身に軽く電気が走ったような感覚
になりビクっとした。英輔が忘れようとしても絶対に忘れることのできない懐かしい声
だ。その声の主は彼女に決まっているが、それはあまりに英輔の意表をつく出来事だっ
た。
その動きは幸都恵にはっきりと伝わった。幸都恵の腰を英輔の手がギュッとつかんだのだ。そればかりか、一瞬ではあるが英輔の体は間違いなく宙に浮いていた。その動きだけではなく英輔の中の心までテレパシーの様に幸都恵には瞬時に伝わってきた。
英輔が徐に振り向くと幸都恵も英輔と向き合うような形で振り向いた。
そして
「あぁ！洋子さん。」と英輔はぎこちなく言うと、幸都恵には一切

目をくれずに踵を返して小走りに戻った。英輔の背中はとても素直に喜びを表現していることが幸都恵には見て取れた。
それは英輔と洋子の久しぶりの再会だった。
洋子も少しだけ早足にこちらに向かってきた。先に声をかけたのは英輔だった。
「いやぁ久しぶり。元気だった？」
「英輔君こそ、随分ご無沙汰じゃない？元気？」
「俺はいつだって元気だよ！」
「最近どう？忙しいの？」
「貧乏暇なしだよ！もう色々と・・・まいっちゃうよ。洋子さんこそ最近どうなんだい？
まあ元気そうで安心したけど・・」
英輔と洋子の会話はあまり弾まなかった。
英輔の心の中には洋子との思い出が後から後から湧いてきていたのだけれど、今の英輔は
浮気が妻に見つかってしまったような恥ずかしい思いが心の中を巡っていた。
ここで洋子が登場するというシナリオは英輔の中には全く存在しなかった。今朝方の雄三
の話では洋子は今日は帰宅しないという説明だったからだ。
洋子に会いたいという気持ちもあったが、幸都恵と一緒の所を見られずに済むという安堵
がそこにはあったからだ。
それでも英輔の顔からは隠すことのできない笑みが自然にこぼれた。
洋子との再会を心か
ら喜ぶ顔だ。

私は一人ぼっちになってしまった。そう思わせるような2人の雰囲気を幸都恵は感じてい
た。2人の会話が確かに聞こえてくるわけではないのだけれど、と

ても楽しく嬉しそうに幸都恵には見えた。ここに立って待っているのも、そう大した時間じゃない・・・それに
あんなオヤジが何処の誰とどのような会話をしようと知った事ではない。
　仮に英輔が満面の笑みを浮かべていたとしてもそれがどうというわけでもない。
‘私とこのオヤジの関係なんて知り合ってからまだ間もないのだし、それほど深いわけでもない。お互いに何を知っているわけでもないんだから・・・’
それなのに何故なのか？理由は分からないけれど・・「洋子」と言う女性の登場が幸都恵の
心中に不安と焦りとそして大きな嫉妬を誘発したのだ。結局それが2人の会話を遮りたい
という強い思いに繋がった。心の中から怒りにも似た感情が湧き始めてきて、幸都恵
は自分でも気づかぬうちに2人に近づいて行った。
幸都恵は英輔に対し「早くこっちに来て・・・」と言おうと思った筈だった・・・
それなのに口をついて出た言葉が何故かあんなになってしまった。
「これじゃ結婚宣言だよ！」今までにない屈辱にも近い感情に襲われる事になってしまったのだった。

第1章（その2）

英輔はどうすることもできず。
「あっそうだ、紹介するよ。石野洋子・・ああ?・・・??あっいや、えっと!さと・・?いしのさとえ??さんだ・よぉぅ・・僕の・会社の・・後輩・・・」としどろもどろになりながらも辛うじてさっきと同じ言葉を繰り返しながら幸都恵のほうに歩み寄った。しかし足の運びがなんともぎこちない。心臓の鼓動は早くなっていたし、今血圧を測ったら
相当高いだろうな、１５０には達しているか?俺は普段１００くらいしかないのになぁ。
案外冷静な考えも出来たりするものだ。と複雑な心境のまま幸都恵の目の前に立った。
その姿を自分の中で想像すると更に恥ずかしさが増していた。赤い顔を見られたくない
のでやや斜に構えながら右手を伸ばし
「あちらが洋子さん。さっきヨットを教えてくれた川島さんの奥さんだよ。」と極めて冷
静を装いながら紹介したつもりだが声は確実に裏返っていた。幸都恵はといえばその視
線はここになかった。洋子を見ているのだろうか?
目線が合わない隙に幸都恵の顔をじっくりと観察したのだが、頬にも瞳にも涙の跡はな
かった。英輔は今の出来事に困惑した。確かにこの女性(ヒト)は泣いていた筈だけれど・・
これをデジャブというのか?英輔はここでも戸惑った。
真っ赤になった顔を幸都恵に見られずにはすんだが、この状況はどのような言葉をもってしても説明がつかなかったからだ。
英輔に続いて洋子が徐に幸都恵に歩み寄った。

うわぁ近づいて来る。幸都恵は緊張したが、洋子の顔が微笑んでいたので少し安心した。
「幸都恵さん？」洋子が話しかけてきた。
「はい」幸都恵は小さくうなずいた。すると
「初めまして、川島洋子です。」と洋子が右手を差し出した。幸都恵は一瞬躊躇いはしたものの直に右手で握手に応じながら
「石野幸都恵です。宜しくお願いします。」と挨拶はしたのだが、洋子の顔を真正面から見ることができずに少し俯きながら洋子の色白な手を見つめたまま握手に応じた。その手の感触は今まで幸都恵が感じたものとは異質だった。握手なんて何度となくしてきた。硬い手、柔らかい手、暖かい手、冷たい手、握力の強弱だってそれぞれ違う。・・・ただ・・どうしてもこれを上手く説明できる言葉が見つからないのだった。
「こちらこそ！・・」と洋子は言いながら少し間をとった。
「・・・ところで貴方達どういう関係？」英輔の顔を見ながら静かに言った。実は洋子の目尻は吊り上っていたのだが、英輔は恥ずかしさから目線を合わせずにいたのでそれに気づかずに
「会社の後輩だって言ったじゃないか！」とそれだけ答えると、ヨットのあるほうへ歩き出した。
洋子は出来るだけ冷静を装った。
今日は、待ちに待った英輔との久しぶりの再会だったのに・・・夫の雄三からは
「英輔が会社の同僚と来るってよ！」と聞かされていただけだった。都合がつかないことを装いサプライズで登場すれば、英輔は間違い

なく驚き喜んでくれる。
洋子は確信してこの瞬間を待ち構えていたのに、とんだサプライズに遭遇することになってしまった。正に逆サプライズだった。
「同僚！」そう聞けば女性だなんて思わない。それなのに・・・
どう見ても英輔の同僚ではない。愛人というには不釣合いだけれど、親子ではない。でも夫婦ともいえない。ただ今言えることはその娘(こ)は間違いなく若い。
‘２０代前半ではないかしら？’と洋子は見た。英輔とは１０歳近く年齢が離れていることになる。
彼が奥様と一緒ならば納得しないわけにはいかないけれど、なんとも説明の難しい間柄の女性(ヒト)とこんな形でお目にかかることになろうとは・・・こんなシナリオも又洋子の中には存在しえないものだった。
幸都恵が目を伏せている間に洋子は幸都恵をじっくりと観察した。肌はキメが細かく色白で輝いていた。それなのに、綺麗とはお世辞にも言えない酷いメイクをしていた。これなら素顔のほうがよほどマシ。
笑いが思わずこみ上げてきた。それをこらえるのに必死になってしまい、肩がゆれた。
「でも？もしこの幸都恵という娘が今とは違うメイクをしていたら？」と考えると、それはやはり美人という言葉が当てはまるだろうほど綺麗である事は理解できた。
それが洋子の疑問も呼んだ。
何故こんなメイクをしているの？バカにしているの？
普通の女の子なら、どんなに下手でもこういう風にはならない？・・・ううん・・しない。と言うか？？恥ずかしくてできない。‘絶対何かあるわ！’
その確信的な興味と疑いが英輔への嫉妬にも変わった。英輔が意図的にこういうメイクをさせていると感じたからだ。英輔が純真な乙女心を弄んでいるように思えたのだ。またそういう英輔の言うがま

まにしている小娘にも怒りを覚えた。しかし一方で洋子の知る英輔はそういう事を強制させる男ではない。
‘・・・でも！浮気・・・？？・・・不倫関係ではなさそう？’にも思えた。
‘彼が再婚したとも聞いていないし・・・’「そう同僚なのよね！」
心の中で多岐な詮索が湧き始め思考が行きつ戻りつした。・・・・・
結局この２人に色々と湧いた疑問と興味を満足させるには、もう少し様子を窺うことが最善という結論になった。
洋子は少し膝をかがめて、下から幸都恵の顔を覗き込むと
「幸都恵さん！今夜家に泊まっていかない？何か予定があるなら無理にとは言わないけど・・」と言ってみた。
夫の雄三は英輔のことになると言葉数が減って多くを語らない。彼の近況を知るにはこの
娘に語らせるのが良い方法だと思ったのだ。
幸都恵は突然の誘いに戸惑った。その時初めて洋子の顔を見た。洋子は幸都恵の意に反して笑顔だった。
‘つい今さっき英輔さんに声をかけた時は確かに怒りがあった筈よ。あの声のトーンからしても間違いない筈。笑顔と怒り！どちらが今の本当の洋子さんの感情なの？’と考えながら
「あっ・・はい・・別に予定は・・でも・・あのぅ・・吉岡さんが・・」と幸都恵は気持ちの整理がつかないままで曖昧な答えを返した。
洋子は
「英輔くん？なら多分大丈夫よ。貴女が良いって言えば、それに従う筈よ！じゃぁＯＫって事ね・・・」と笑顔で返した。
少し強引！？と幸都恵は思ったが、黙ってうなずいた。少しばかり冷静さを取り戻し始
めた幸都恵は、英輔と洋子の関係の詳細が明らかに出来るかも知れない。という期待と興味が出始めたからだ。英輔はどうやら只のオヤジではないらしかった。
それに英輔よりも１０歳位は若く見えるこの女性が何故「英輔くん」

とクンで呼ぶのか？
不思議だった。相当親しい間柄なのだろう。それだけに英輔の実態を知るにはこの女性
に語ってもらうのが最善だろうし、わざわざ向こうからその機会を作ってくれそうな気
配なのだ。気持ちを切り替えることにした。
図らずも2人の利害は一致した。
「幸都恵さんワインは？」と洋子はたずねた。
「ワイン？ですかぁ？」幸都恵は洋子の言葉の意味が理解できずにいた。
「ワインお好きかしら？良いワインが手に入ったのよ！嫌いじゃなかったらぜひ一緒にどう？」
ワイン好きか？って聞いていたのね。幸都恵は理解した。
「あっ、はい　ありがとうございます。ぜひお願いします。」幸都恵は明るく答えた。
その答えを聞けば洋子はもう十分だった。
「じゃぁ気をつけて行ってらっしゃい。そして楽しんで来てね！」
洋子は言った。
‘へぇ、やっぱり夫婦だわ。さっき雄三さんも同じ事を言ったわよ’と幸都恵は考えていたが、その間に洋子は英輔に視線を向けなおし、
「英輔くぅん、それじゃ後でネェ。気をつけてぇ」と大き目の声で呼びかけた。英輔は大きく洋子に手を振って返した。その様子に幸都恵は何か物足りなさを感じた。
今の私と彼女の会話が彼に聞こえたとは思えないけれど何となく2人には理解しあえているらしい気配を感じたからだ。だからといって「それで通じているんですか？」と確認するのはどう考えても馬鹿げている・・・
幸都恵が近づいてきたので
「よし、じゃ行こっか！」英輔は元気に幸都恵に声をかけた。

「ばぁか！嘘に決まってるだろう。本気で言うわけねぇだろう！」
幸都恵は急に乱暴な言葉になった。幸都恵の豹変に英輔は戸惑ったが
「わかってるよそれくらい！行くぞ！さっさとしろよ・・」と毅然
と言った。
「はい」と幸都恵は素直に従い笑顔を作ったが、すこしぎこちない
笑顔？と思った。
２人が沖へ出るところを見届けた後、洋子はワインを探しに出かけ
た。あの日と同じワ
インを手に入れるために・・今日こそ英輔にワインの薀蓄を語らせ
たかった。

第1章（その3）

英輔がヨットを操るのは１０年ぶりだった。何しろ幸都恵が全くの初心者だから、慎重に進めた。海を侮ると命にかかわる重大な事故につながりかねないからだ。
今日の海は比較的穏やかだった。風はそれほど強くなかったが、慣れていない者がヨットを楽しむには十分だった。それでも時間がたつにつれ、英輔は徐々にペースを掴み、風も見えるようになって幸都恵をリードした。それにつれ艇は順調に進んだ。
そうなると余計な事を考える心の余裕が出てくるものだ。
どうしてこの女は「俺と結婚するなど」と言ったのだろう？
俺もまだまだ捨てたもんじゃないな！と内心嬉しかった。幸都恵との結婚生活はどんなものだろう？とありそうも無いことを考え始め、英輔のイマジネーションは更に活発に動き出した。
幸都恵の胸の膨らみも興味をひいていた。職場では気づかなかったのに、ここへ来る前に雄三の家でＴシャツに着替えた幸都恵を見た瞬間から、もうたまらなかった。
これほど大きいとは思っていなかったからだ。‘最低でもＤ以上はあるだろう？ホックは前についてるのかな・・・レースとか付いてるのかな？透けて見えないから今日はベージュか？’英輔はイメージの中で幸都恵の胸を何度も揉みしだいた。
幸都恵はそんな英輔の妄想など分かる筈もない。
海から眺める景色は本当に格別で楽しかった。‘ヨットの上で感じる風はとても爽やか！’アスファルトの上だったら、蒸し暑く不快に感じる陽気なのだろうけれど、海の上では殆どそれを感じることもない。風の吹いてくるほうへ意識して顔を向け、何度も髪を風になびかせてみた。
‘ヨットって本当に楽しい！来て良かったぁ’幸都恵は心からそう思った。

同時にヨットを操る英輔の姿はとても逞しく頼もしく見え、英輔の横顔は男らしい印象に変貌していた。最初に見た時はとても印象の悪かった無精ひげも、少しばかりの長髪も素敵だったし・・・帽子のツバを後ろに向けてかぶっている様子も少年のようであり何もかも素敵に見え始めていた。サングラスをしているせいもあるのだろう・・・意外にもそれは英輔に似合っていた。下がり気味の目尻が見えないから精悍な印象で若く見える。海の上というシチュエーションも又幸都恵の英輔に対する好意を大きくしていったのだった。

英輔という‘この男（ヒト）は一体どんな生活をしてるんだろう？’とか、‘いつからヨットをしているのだろう？’とか、色々な興味が湧いてきた。そんなことを考えていたら風の影響からか？少し唇が乾いていることに気づいた。‘唇の荒れは大敵、唇が切れたりしたら大変。’幸都恵は舌を少し出したり、唇を擦り合わせたりしてその場をしのいでいた。

英輔が馬鹿な妄想をしている間も艇は順調に進み、そろそろ進路変更が必要な所に来ていた。‘もう少ししたらタックしよう。幸都恵さんに伝えておこう。’そう思って幸都恵の顔を見ると、幸都恵の唇がもぞもぞしていた。それに気づいた英輔はスラックスの左ポケットを探りリップクリームを取り出すと右手でキャップを取って、底をクルクルと2回まわし、幸都恵の顔の前に黙って差し出した。

その時幸都恵は海を見ていた。顔の前に英輔の左手がスッと伸びてきて、その指先の物に気づき英輔の意図は理解できたが、少し躊躇いが出て英輔の顔を見ようとしたが、彼の視線はなかった。幸都恵は英輔の視線が戻ってくるのを暫らく待ったけれど、その気配はなかった。

幸都恵は意を決したかのように英輔の手を自分の右手でギュウっと掴むと、唇を強く押し当てリップクリームを無造作に塗った。英輔はその力強さに驚き慌てて幸都恵の目を見たが、幸都恵は下を向いたままリップクリームを動かしていて視線を合わせてはこなかった。まもなく塗り終わり唇を離すと、そこでようやく2人の目が合った。

幸都恵は首を少しだけ左へ傾げながら頬だけで笑顔を作った。
手を離した時、ルージュの色が残っているのに気づいたが、直ぐに英輔が自分の唇に塗り始めてしまった。
‘それって間接キスだよ！’と思ったが、英輔はそれに気付く様子もなく、塗り終わると
「女の人も唇乾くんだね！」と言ったきり、またポケットにしまいこんだ。
英輔にとって幸都恵の口紅は好都合だった。幸都恵のしている事を間近で具に見ていたのだ。口紅に気づかぬ筈はない。しかし考えてみたら幸都恵の唇を間近で見るのは初めてだった。グロスとか言ういわゆる艶出しのような口紅を塗っていた幸都恵の唇は意外にも厚くやわらかそうだった。でもそれが顔全体のバランスを崩すわけではなかった。
寧ろ英輔の妄想を更にかきたてた。最近人気のある、あの唇の厚い胸の大きなアイドルを連想して、英輔の股間に血流が集中してきた。その妄想を満たすためにも自分の唇にもリップクリームを塗って少しだけ快感を味わってみたのだった。心臓の鼓動が大きくなってきた。英輔の想像の中では既に幸都恵は全裸だった

第1章（その4）

幸都恵はとても恥ずかしく耳まで赤くなったがその理由がわからなかった。‘キスなんて今までに何度となく経験があったのに・・・’この恥ずかしさの理由がわからず困惑した。

それにしてもあの洋子さんって言う女はこの英輔さんとはどういう関係？そんな風に考えを切り替えて恥ずかしさを消そうと試みた。

洋子の出現は英輔の今までのイメージをがらりと変えた。モトカノ？こんな風采の上がらないオヤジがあんなに綺麗な女性と交際していたとは思えない。昔はかっこ良かったのかしら？とにかく幸都恵から見ると洋子は綺麗で素敵だった。幸都恵が憧れるとしたら洋子のような女性を目指したいと思うような女だ。悔しいけれどこれは現実だ。あれこれと考えをめぐらしていたら、いつの間にか英輔との最初からの記憶を辿っていた。

第2章（その1）

第2章

ピ～ンポ～ンパ～ンポ～ン。チャイムが鳴った。幸都恵は腕時計を見て、ふぅーっと息を吐いた。

「やっと・・お昼だぁ。うわぁ疲れた。」首を2，3回左右に振って疲れを取った。無意識に右手が左の肩に回る。

‘結構疲れるなぁ！やっぱ何やっても大変だわ。’そんなことを考えながら食堂に向かった。

‘あはっ今日はから揚げがある。ラッキィ！それにしても、こんな事で喜ぶようになっちゃったのぉ？私って？？’そんなことを心の中で呟きながらいつものテーブルに向かうと、見知らぬ男が同僚の工藤の隣に座り、なにやら親しげに話しをしながら食事していた。

‘失礼しちゃう私の席でしょ！誰このオヤジ？’幸都恵はむっとして、頬を膨らませ、唇を尖らすとその男の脇に仁王立ちした。それに気づいた男は・・

「あっぁ。ごめんなさい」そういうとあわてて立ち上がり食事中のトレイを両手で持つと工藤に対し

「じゃぁ続きは後でね」と言った。入れ替わりに幸都恵は無言で座った。

「本当に申し訳ありません。ごめんなさい」そう言うと、男は食堂の隅のほうへと歩いて行った。

「少しくらい待ってやれば良いのに・・」工藤が言った。

「いいじゃん。私の席なんだから・・・。でも誰？あのオヤジ？」

「あっ、ああ。吉岡さん？知らないんだ？」

「ヨシオカ？知らない！誰？」幸都恵は少しいらいらしていたのでぶっきらぼうに早口で言った。

「開発室の人。会社じゃ一番の有名人じゃないかなぁ・・？？あっ

そうか幸都恵はＩターン組だから知らないのか？まだ１回も会ってないのかなぁ？」工藤には少し意外だった。

吉岡英輔は約５年ほど前にこのカナリア商事に入社した。当時は５０名にも満たない小企業だったが、この２，３年で急成長してきた。今年４月には、新卒と中途あわせての大量入社があり一気に２００名を超えた。工藤と幸都恵は中途入社だが、工藤は地元採用なので英輔の面接を受けたのだが、幸都恵はＩターンなので都内で面接を受けていた。Ｉターンは外部業者の面接だったので、全く面識がなかった。

食堂は拡張されていないので極めて狭く、昼食時間が３交代というありさま。幸都恵と工藤は第１シフトでの食事時間なのだ。

それでもまだ食堂に入りきれない人もあって、そのような時は女性優先というのが、この会社の暗黙のルールだ。

そんな理由から、英輔は幸都恵に席を譲る義務があったのだ。一般の企業なら若い中途入社社員は先輩に気を使って、空くまで待つのだが、ここではそんな一般常識は当てはまらない。

「っで誰？その吉岡ってオヤジは？」幸都恵がぶっきらぼうに工藤に聞いた。

「開発室の人でさ、中では一番の先輩。色々仕切ってる人。すっげぇ仕事できるし、面倒見が良いから結構みんな頼ってるよ。なんかわからないことあれば、みんなすぐに吉岡さん吉岡さんって感じだよ」

‘ふうん。あのオヤジが？人は見かけによらないんだなぁ。’と思った。「なんだか不潔そうじゃん。」

それもそうだ、髪はべたッとして何日も洗っていなさそうだし、目尻は下がり、無精ひげを伸ばしている。作業ズボンは折り目など全くなく皺だらけなのだ。誰がどう見ても、いけてないオヤジとしか表現のしようがなかった。

「なんかだらしないって感じ。まるでホームレスだよね！」と幸都

恵は言い切った。
「まぁ確かにそうだね！でもそう思うってことがもう既にあの人の罠にはまっちまってるんだぜ」と工藤は言った。
「わなぁ？なにその罠って・？」幸都恵が聞いた
「簡単に言うとあれがあの人の他人を騙すスタイルってことさ。いつもパリってしてると、周りの者が近寄りがたいだろう？って。だからああいうスタイルで周りを油断させてるらしいよ」
「油断？何それバッカみたい」幸都恵にはありえない存在の男だ。そういう感覚は理解できない。
「不潔なほうがよほど周りに嫌われると思うけどな！」幸都恵は更に不機嫌になった。
「言ってみりゃ実際そうだよな。でも年がら年中あのスタイルじゃないからね。
プレゼンの時なんかはぜんぜんパリっとしちゃって別人になるしね。なんていうか??
そういう変化？つうか・・・なんだかあの人のペースに引きこまれてって、結局ファンになっちゃうんだよなぁ。不思議だよ。
たとえて曰くあの人はいくつもチャンネルを持ってるんだってさ。
だからあれは人を油断させて・・・
例えばさぁどう見ても完璧な身なりの人とああいう吉岡さんみたいな人と二人並んでてさ
、どっちが印象に残るか？っていうと吉岡さんみたいな人のほうがインパクトあるらしいよ。第一印象は悪ければ悪いほど人の記憶に残りやすいんだってさぁ・・・
最近少しだけわかってきたけど、多分ああいう雰囲気の時はリラックスっつうか・・・あまり緊張感なくても良い時なんだよなぁ。
あの人にとっては暇な？時なんだよね！チャンネルは仕事だけじゃなくってプライベートも使い分けてるらしいよ。なんたって多趣味だって言うし。まねできないわ。」工藤は静かな口調だがはっきりと話した。

‘第一印象は悪ければ悪いほど人の記憶に残りやすい？’？？なるほどそういう考え方ももしかしたら案外間違っていないかもしれない。幸都恵は少し興味を持った。
けれどそれ以上に「多趣味」という言葉に興味を持ったので
「多趣味ぃ？」幸都恵は確認した。
「うん、そう、趣味が多いってこと・・！」
「わかってるわよそれくらい。多趣味ってどんな趣味があるのかなぁってこと！」
「まずぅ・・スキー、ゴルフ、釣り。早起き野球もやってたって言ってたな。後は乗馬に・・・アメフト？・・・あぁそうそうヨットが好きだっても言ってたな・・」工藤は指折り数えながら言った。
‘ヨットぉ？ふうんあのオヤジがねぇ？’と幸都恵は思っていた。
工藤は続けた。
「まあ吉岡さんの話を聞いてると、ホントに色々知ってるし、勉強したんだろうな。
何聞いてもチャンと的確に返してくるし！・・・それにさぁもっとすごいのがぁ外国語！
普通英語しゃべれるだけでもすげぇじゃん？なのにさぁあの人ときたら英語だけじゃなくてフランス語とドイツ語も話せるんだってよ！トライリンガル超えて正にマルチ人間、一体全体何者だぁ！って感じだよね。
もうさぁ人生自由自在って言うか、人生を思い通りに生きてる？みたいな？・・・余裕すら感じるよな。」
その言葉を聞いた幸都恵は、「自由自在。人生を思い通りに生きる。」という言葉に大きな意識が集まった。そういう生き方をしている人ってどんなだろう？一瞬にして英輔に大きな興味が湧いてきた。
それってどのような生き方なんだろう？私だって・？・？ううん、多分世の中の殆どの人が・・・きっと工藤君だって・・その他の人も皆思い通りに人生を生きてみたいって思ってる筈だけど・・・と考えながら、幸都恵はぼんやりと英輔のほうを見ていた。英輔は下

げ膳カウンターにトレイを載せながら残りの食事を続けていた。‘工藤君の言うように少し待ってあげても良かったかなぁ？色々と話を聞いてみたいな。’と少し後悔が湧いた。席が全く空いていないわけではなかった。‘１人くらい余計に座ってもどうってことなかったのに・・’と思った。只のオヤジじゃないんだぁ・・幸都恵は心の中で呟いた。

「ちょっと幸都恵どうしたの？何かあった？」向いの席の千春が聞いてきた。

「あれ千春？いつの間に来たの？」

「はぁ？あんた何寝ぼけてんの。さっき来たじゃん。マジぃ？」

「あっああ・・そうだったっけ・・」

「失礼しちゃうわね。というか幸都恵は何考えてたの？私が来た事も気がつかないなんて」

「うっううん、いやぁこんな田舎にもヨットをやる奴がいたんだなぁ。あんなオヤジもヨットなんかやるのかっ。と思ってさぁ。」幸都恵はとっさに浮かんだ言葉を口に出しただけだったが

「えっ？ってことはぁ幸都恵もヨットやるんだ！ヨットって聞くとなんだかセレブっぽぉい。ねぇいいわよねぇ」と千春は幸都恵と工藤をかわるがわる見た。

‘ああセレブね！セレブかぁ・・？それにしても千春は意外なところに食いついてくるんだ！’と幸都恵は思った。

「まぁね、私なんかは大した事ないけど・・」と言葉を濁したつもりだったのだが。

「すごーい、ヨットってすごくお金かかるんでしょ。ね。やっぱ幸都恵はセレブなんだ。ねぇねぇ私でも乗れるのかな？今度良かったら私も連れてってよ！」と千春は更に重ねてきた。

「あ、そうね。チャンスあったらね。」幸都恵は又も言葉を濁したつもりだったが

「やったぁ、楽しみ。」千春はとても喜んで工藤の顔を見つめた。

「工藤君も今度一緒にどぉ。勿論良いわよね」千春は言った。
「俺？俺はそういうのはちょっとなぁ。なんだか船酔いしそうでさ」と工藤はあまり乗り気ではなかったので千春はすぐ幸都恵に話題をふった。
「ねぇところでさ！ヨットってどこでやんの？」とても嬉しそうだ。
「ん・・・海！」幸都恵の意識はまだ英輔にあったので抑揚のない声で単純に答えた。
「んっぐっ」頬が膨らんだ工藤はあわてて自分の口を左手で押さえた。お茶を一口飲んでから
「わぁアブネェ、噴出すとこだったぞぉ！ヨットは海でやんに決まってんだろ。人が飯食ってるときに悪い冗談やめてくんねぇかな！お前らの話は三流の漫才にもなんねぇぞ！」と呆れた口調で工藤が言った。
「ごめんごめん、笑わすつもりはなかったんだけど・・私も海でやることくらいは知ってるつもりだったんだけど・・」千春があやまった。
「だけどさ、お前らの会話、結構マジだったよ。幸都恵なんか本気で『海』とか言ってる雰囲気だったけど・・真面目な顔してしょぼい冗談言うなよナ。」
「だって、知らないのかなぁ？って思うジャン。本当ごめん。全部あのオヤジが悪いんだわ。ヨットなんかやるからだよ」幸都恵は話をすりかえた。
「そういう問題じゃないような気もするけどな」工藤が言った。
そんな話しの中、幸都恵がもう1度英輔のほうに目線を送ると、食事を終えて出て行くところだった。ちょうどそこに彼と同年代位の1人の女性がやってきて、なにやら二言三言会話を交わした。とても仲良さそうに談笑している姿が見えた。
「誰？」ふと幸都恵の口をついて出た。工藤が幸都恵の目線の先を追っていくと会話をしている2人が見えた。
「あの女の人のこと？」工藤は尋ねた。

「そうあの女の人」
「あの人も知らないのか？あの人も開発室の人で小池さん、吉岡さんの先輩。そうだな吉岡さんの唯一の先輩だなぁ！」工藤は今更ながら英輔にも先輩がいることに気づいた。
「入ったばかりは色々と教えてあげてたらしいけど、今は吉岡さんのほうが教えてるかな？でもあの2人は息ぴったりって感じで、いつも2人で何か話ししてるな。吉岡さんが言うには、最高のビジネスパートーナーらしいよ。」
「パートーナー？」その言葉に幸都恵は反応した。とても印象に残り、なんとも言えないような不思議な気持ちが幸都恵の中から湧き上がってきた。
「それにしても今日は初対面の人が多いなぁ。小池さんくらいは会ったことあると思ってたけど・・・」工藤が言った。
「私も今そう思ってたところ」と幸都恵は答えた。その時
「ねぇ幸都恵。ヨット・ね・絶対よ。私楽しみにしてるからね！」
千春は念を押してきた。
「ああ、そうね！わかった。私も楽しみにしてるわ」と簡単に答えた。
「絶対だよ。ね！ぜ・っ・た・い」と千春はしつこく念押しした。
「分かってるって」と幸都恵はとりあえず返したが、内心参ったなぁと少々後悔した。
千春の熱が冷めるのを待てば良いか、それか最悪あの吉岡ってオヤジに頼んじゃえば手っ取り早くて楽？それだと私がヨット初心者って千春にバレちゃうでしょう・・そうなれば千春と行く前に少しくらいは予備知識持ってたほうがいいかなぁ？まずは聞いてみようかな？と幸都恵は考えながら英輔の動きを目で追った。
そうだヨットだよ。あの人に近づく口実できたんじゃない？幸都恵にとっては名案のような気がした。
間もなく英輔は食堂から出て行ったが、胸騒ぎのような不安のような、なんとも言えない思いが心の底から湧き上がってきていた。だ

がその理由ははっきりとは感じ取れなかった。

幸都恵はその日、残業になってしまった。後輩の1人が腹痛を訴えて早退してしまったのだ。そのため19時まで作業をしていた。所属部署の事務所にあるパソコンでIDカードをリードして、退勤操作をした後、開発室のあるフロアへ行ってみた。開発室近くの談話コーナーにある自動販売機でカップコーヒーを買い椅子に座った。まだまだ大勢残業している様子だった。ざわざわと人の声がする。開発室って何人くらいの人が働いているんだろう。仕事の内容も気になったりした。吉岡さんもこの中にいるのだろうか？とかそんなことも気になったが、これ以上奥まで入る勇気が無く、コーヒーを飲み終えると会社を後にした。

その後、車で15分ほどのところにある本屋へ向かった。ヨットに関する本を探すためだ。

駐車場に着いて車を止め、降りようとしたその時。プルプル～と携帯がなった。正志からだ。

「なぁに？」幸都恵は電話に出た。

「なぁに、じゃないだろう！今どこ？」正志は少し怒っているようだった。

「どこ？って本屋。」何を怒ってんだろう？と思った。

「本屋？本屋で何してんの？早く来いよ。もう1時間も待ってんだぞ！何を呑気に本屋なんか寄ってんだよ。」

「・・んん・・ちょっと調べたいことがあったもんで・・・」

「それって大事なこと？彼氏よりも大事なことか？それよりもなによりも、自分の誕生日よりも大事なことか？」

誕生日？？？あああ！！！そうだ！今日！私の誕生日。すっかり忘れてた。どうなってんの？今朝家を出る時は確かに覚えたジャン。今日正志と一緒に食事する約束があったってことも。それなのに、どこでどうなったのか、他人から言われるまで忘れてるなんて超ショック。

「ゴメン今すぐ行くわ。ホントゴメンすぐに行くから待ってて。今すぐ行く。」幸都恵は同じことを何回も繰り返して言った。
急いでアパートまで車を走らせたが、いつになく遠く感じた。
「ちっくしょう。」車の中で思わず叫んだ。全部あのオヤジのせいだ。大体あんなところで飯食ってるからいけないんだよ。あれで全部今日の私のペースが狂っちゃたんだから・・・。
アパートの駐車場に着くと正志は車から降りて待っていた。
「ッたくもうなにやってんだよ。勘弁してくれよな！」
「ほんとゴメン」今の幸都恵にはそれしか言う言葉がなかった。あわてて部屋に入ると着替えをしたが、着ていく服をあれこれ選んでる時間はなかった。一分一秒を惜しんで直ぐに着替えて部屋を出た。幸都恵の顔を見ると正志は車に乗りエンジンをかけた。幸都恵は車の外で立っていたが正志は車の中から、
「早く乗って！」と促した。幸都恵は助手席に乗り込んだ。
「ったくどんくせぇ女だなぁ」正志はぶっきらぼうに言った。
「すいません」幸都恵もぶっきらぼうに返した。
ってか1時間も待ってんだったらその前に電話でもすりゃいいじゃん。と幸都恵は思った。
「今日の店はお前のリクエストだろ。お前が是非にって言うからせっかく予約したのに・・時間だって2時間って決められてるんだぞ。1時間も遅刻したら、後1時間しかないジャンかよ」正志は語気強く言った。
「ゴメン待たせたことは悪かったけどさぁ。あんただってもっと早く電話くれればいいじゃない」と幸都恵は少しばかり反論したくなり言った。
「はぁ電話？何回したと思ってんだよ」正志はかなり語気荒く言った。
幸都恵は携帯を出して確認した。1，2、・・・数えてみたらもう10回以上正志からの着信が履歴に入っていた。そうだ今日に限って電池不足になってしまい、乾電池式の充電器を付けてずっとロッ

カーに入れていてその間に正志から連絡が入っていたのだ。
「ゴメン、ホントゴメン。今はこれしか言うことないわ。今日ね後輩が1人お腹痛いって帰っちゃってさぁ、それで残業になったもんで・・でもやっぱ一番きついのは私だよ。だって今朝はちゃんと覚えてたのにさ・・・自分の誕生日忘れるなんて最悪ジャン・・・」
幸都恵の声に力がなかった。それだけ言うのが精一杯だ。
正志は幸都恵の心底謝っているらしい様子を声の感じから察して少しばかり気がおさまり
「怒ってゴメン。忙しかったんだな。まあいいや今日は目一杯楽しもうぜ。明日は休みだしな。一晩中でも良いだろ。」と言った。
「うん。ありがとう」正志の機嫌がなおった様子に幸都恵は安心した。

第2章（その2）

その店は商店街の中にあった。目立たないたたずまいで、幅1m位の階段をあがった2階にあった。ドアを開けると、「いらっしゃいませ」とウェイターが出てきて「ご予約は？」と聞いてきた。

「佐藤です。」

「佐藤様2名さまですね。お待ちいたしておりました。」とテーブルに案内した。

あれっ幸都恵は？

ドアは直ぐに閉まった。幸都恵は無意識にドアの前で立ち止まっていた。正志がドアを開けて待っていてくれるものと思っていたからだが、ドアの外に置き去りになった。

瞬間ムッとしたが、直ぐに気を取り直して中に入った。こんなところで自分の感情を出してせっかくの誕生日を台無しにはしたくなかった。正志は既に奥のテーブルの前に居た。幸都恵を見つけて

「何やってんだよ。」という正志に

「何？」ってそっちが悪いんジャン。さっさと勝手に入っちゃってさ！と思ったが、

「ゴメン。ドアの閉まるのが早くってさぁ」今日は我慢我慢。幸都恵は自分に言い聞かした。・・・でもどうして私が我慢しなきゃなんないの？・・・自問自答したが、それでも色々あったし、今日はもうこれ以上最悪の日にしたくないからね。と言いたいことを幸都恵はぐっと胸の奥にしまいこんだ。

席に着くとウェイターが

「直ぐに始めさせていただいてよろしいですか？」と聞いてきた。

「はじめる？」正志が聞き返した。

「はい。本日はコース料理となっておりますが、サービスを開始させていただく前にお客様のほうで何かイベント等のご予定がお有りのようでしたら、お知らせください。」

「ああ、そうですか！別にないです」と正志。
「かしこまりました。」ウェイターは直ぐにワインリストを持ってきた。
正志は開いて中を見たがワインなど全く興味を持っておらず飲んだことなどなかったから、選べなかった。
「さっぱりわかんねぇな。幸都恵は何が良い？」
「私？選んで良いの？そうねぇ・・！」飲んでみたいワインがあったが、正志のことを考えるとあまり高いのも頼めないなぁ。でも！と思い切って言ってみた。
「ええ！それって・・・お前ワインなんか分かんの？値段で言ってねえか！」
正志の反応は幸都恵の想像通りだった。やっぱりそうだよね！この店では高いほうだった。
２５０００円と値段が付いていた。安めのはコクが・・？と少し迷ったが結局５０００円のワインにした。
「じゃぁそれで。」と正志がオーダーした。
ウェイターがワインを運んできて、色々説明をしたが、正志は聞いていなかった。
テイスティンググラスに注がれたが手を伸ばさなかった。
「あのテイスティングを・・」と進められたが、正志は何もしなかった。
「テイスティングをお願いします」と再びウェイターは正志の顔を見ながら言ったが
それでも正志は何もしなかった。幸都恵は
「正志テイスティングだってば」と少し強く言った。
「えっ？テイスティング？」
「ワインの味見をしていただけますか」とウェイターはわかり易くいったつもりだったが「別に味見しなくてもこれで良いです」と正志は言ったが
「万一と言うこともありますので確認をお願いします」とウェイタ

ーが返した。
正志はゴクッと飲み干し黙っていた。少し間があって
「よろしいですか？」とウェイターが尋ねた。
「何？」
「このワインでよろしいですか？」
「良いですけど・・・」正志は自分でボトルを取って幸都恵のグラスに注ごうとした。
幸都恵とウェイターは驚いたが、「ただいま前菜を・・・サービスを始めさせていただきます。」と立ち去った。
正志は今まで幸都恵が出会った男性とは少し違っていた。あまり周りに対しての気遣いのない人らしい。それでもこの人と付き合っていくのなら、この人のやり方に慣れていくしかないんだ。顔は結構いけてるから・・・
目はキリッと引き締まっている。鼻筋も通っているし口元も締まっている。なんと言ってもホリがふかく色黒な、エキゾティックな顔立ちだ。身長だって１８０ｃｍ近くはあるだろう。結構筋肉質そうだし、周りの友達に会わせたら、１０人中７人は「幸都恵の彼氏ってカッコイイ」って言うだろうな。でも、今まで周りからチヤホヤされてばかりで相手に対する気遣いとは無縁の生活してきてしまったのかも？そういう男（ヒト）って、自意識過剰と言うか、突き放したらすがりついてくるみたいな、そんな女が理想なんだよねぇ！そういう人とは上手くやっていく自信ないなぁ。と少し憂鬱になったが、今日は折角の私の誕生日なんだからつまらないことをくよくよ考えていても仕方ないな。と気持ちを切り替えて食事を楽しもうとした。
さすがにこの店は千春のお勧めだけのことはあるな。幸都恵は思った。料理はとてもおいしかった。
でもワインは少し幸都恵には不満だった。別に値段が高ければ良いというものでもないけれど、やっぱりもう少しコクと渋みのあるほうが私は好きだなぁと思った。

店側の計らいで、少し時間を延長してもらった。コース料理を楽しむにはやはりある程度の時間が必要なのだ。食事が終わりコーヒーを飲む頃になって
「この後俺の部屋に来てくれないか？幸都恵にプレゼントがあるんだ」と正志が言った。
「プレゼント？何かな？楽しみ」プレゼントって言われちゃえば、素直に従うしかないわよね。明るく答えた。
まもなく会計を終えて２人は店を出た。
帰りは代行だった。まぁ代行でも構わないけどそれなら最初から往復タクシーにすれば？
幸都恵はそんなことを思っていた。

正志の部屋に入ると、正志は小さな包みを持って来て
「はい、プレゼント」とぶっきらぼうに渡した。
「わぁありがとう！」一応ここは喜んどくとこよね！何？プレゼントってこれだけ？それならさっきの店で渡してもらったほうがよっぽど心こもってるけど・・・イベントの予定も聞いてきたしさ！今日はもうずっと我慢の連続かぁ・・・そんなことを考えていたら幸都恵に疲れがどっと押し寄せてきた。
たいした会話もないまま少し時が過ぎて
「今晩泊まってくだろ？」と正志が言った。
やっぱそういうことかい？めんどくせぇ！あんなちっぽけなプレゼントで女心釣れると思ってんのか？と思いながら
「えぇ？無理ぃ。着替えだってないしさぁ・・・」まぁ普通の言い訳か？
すると正志が「えへへ・・・」とにやけた笑いをしたと思ったら、奥のほうから何やら持ち出してきた。新品のネグリジェだった。
こいつマジかよぉ！まぁ男はたいていそんなもんなんだろうけど・・・まあ私も今日で２６だし、全然男を知らないわけでもない。一応付き合ってるってことになればそういうことなのかな？

「でも・・なんだか恥ずかしいなぁ・・・」と言ってみた。
「いいじゃんか。俺だって恥ずかしいけど勇気出してるんだぜ！」
「ええぇ？？でもぅ・・・？？」
「何言ってんだよ。せっかくの誕生日だぜ。思い出作らなきゃ！こういう出来事が後になっていい思い出になるんだよ。あの時ああだったとか。２６の誕生日に私たちは結ばれた。彼の愛を真剣に感じた。とかさぁ・・」正志は言った。
ああこいつマジでバカ。男ってそういうくだらないことにロマンを求めてるわけ？
別にロマンティックなシチュエーションは否定しないけど、こんな狭い部屋で、しかもベッドはシングルに毛の生えたような中途半端なセミダブル・・・そういうこと言うなら、せめてシティホテルのダブルっくらいにはしてほしいわ、私の誕生日なめてんのか？やるかこいつ？・・・そうこう考えてはみたが、上手い言い訳が見つからなかった。
「シャワーくらい浴びさせて・・」アアぁだめ。それじゃＯＫって意味だわ。私って言い訳下手だな！自分に呆れるわ・・・
「じゃぁ先に浴びてきて！」正志は又、にやけながら新しいバスタオルを出してきた。
そこまでやってる？もういいわ・・漫才みたいジャン。と幸都恵は開き直るしかなかった。仕方なくシャワーを浴びたが、何もかも面倒に感じた。髪にドライヤーをあてるのももどかしい、ドライヤーが髄分と重く感じられた。ましてや服を着るのまでつらかった。どうせまた直ぐに脱ぐんでしょ！バスタオルを巻くのも、どうでもいいや！と思ったくらい。結局バスタオルを頭にのせて、そのまま部屋に戻ると
「お前随分気合入ってるなぁ。おれも直ぐに浴びてくるからよ。」と言って正志はバスルームに飛び込んだ。
幸都恵はベッドに潜り込むと、「うぅっわぁ男クッさぁ」と思った。けれど瞬間睡魔がやってきた。

胸を圧迫されるような違和感があって意識が戻ってきた。
「幸都恵。幸都恵。」と何度も耳元でささやく声が聞こえた。
・・・間もなく！幸都恵に意識が戻ってきたが、目はしっかり開かず半開きだった。それを見て正志は
「お前のそういう顔すっげぇ色っぽいなぁ。結構いい女じゃん」と言いながら正志の手が下のほうへと這って行った。その頃になって、はっきりと状況を思い出した。
まいっちゃったなと思ったが、そういうことだったわね。と諦めた。めんどくさい時は声を出せば何とかなるよ。と思い少し大きめの声を出して演技していたら、間もなく終わった。
正志が後処理をしている間に幸都恵はもう寝入っていた。幸都恵にベッドを占領されてしまい正志は寝場所に困った。
幸都恵の胸や下腹部に手を伸ばして揉んだり握ったり摩ったりと色々いたずらをしてみたが幸都恵はまったく反応しなかった。
ただ下腹部に手を伸ばした時には腰が動いたような気がしたので少しばかり興奮と興味が湧いてきて更にいたずらをした。すると幸都恵の右手が正志の腕をぐっとつかんだ。
「おお」正志は更に興奮して手の動きを早めると、幸都恵の右手の力が増した。
「いっつぅ」ものすごい握力に正志は幸都恵の下腹部から手を離した。
すると幸都恵は壁のほうへ寝返りを打ちイビキをかき始めた。
正志は半分だけ空いたベッドに体をすばやくもぐりこませたが今度は幸都恵の背中が正志の上にかぶさって来て息苦しくなった。何とか向こうへ押しやろうとしたが熟睡しているらしい幸都恵の体は思いのほか重くうまく動かせなかった。
正志は結局仕方なくソファーで寝ることにした。幸都恵の頭をそっと浮かせて枕を抜き取りブランケットを抜くために掛け布団をはがした。幸都恵の体が露になった。幸都恵の体はとても魅力的で暫く

見とれていたら正志の下半身が元気付いてきた。幸都恵の寝息が聞こえてきて熟睡しているらしかったので、恐る恐る胸の辺りを撫でてみた。反応が無いので今度は揉んでみた。柔らかい感触がとても心地よかった。正志の下半身はもうすっかり硬くなっていた。それで今度は下半身の先端を幸都恵の乳首に押し当てたりした。そんなことをしながら右手を下腹部の方へ伸ばしていって感触を味わった。けれども幸都恵は本当に熟睡しているらしく大きな反応はしなかったが下腹部の柔らかい所だけは静かにゆっくりと閉じたり開いたりした。それだけでも正志の欲望は大きく膨らんできて硬くなった下半身を左手でしごき始めた。我慢も限界に近づいたところで右手の中指を幸都恵の柔らかいところから抜いてみたら指先がふやけるほど湿っており正志は匂いをかいだりした。少しばかり粘液のようなものが付いていたので下半身の先端に撫で回すように塗ってみたらもう興奮は頂点に達してしまい。「うっ」と小さくうなり声を上げると正志のサーモンピンクの先端から白い液体が流れ出た。ちょうど幸都恵の胸の辺りに放出された。それを右手のひらで広げるように伸ばしてみた。

まるでアダルトビデオのシーンのようで正志の鼓動は早くなった。その後自分の液体を静かにティッシュでふき取っていたら、急にダルさが体中に回ってきた。同時に満足感も湧いてきたのでゆっくりと幸都恵にブランケットをかけてやり、自分も眠りについた。

第2章（その2）

「幸都恵。幸都恵。」と又誰かが呼んでいる。肩をゆすられている。今度は意識が戻るまでに少し間があった。

「いつまで寝てんだよ」と男の声、‘ああ正志か・・’幸都恵は思い出した。

そう言えば・・・ムムん

「えぇ？今何時？」幸都恵は無意識のうちに尋ねた。

「もう１０時だぞ！そろそろ起きねぇか？」正志はぶっきら棒に言った。

‘ええ？もう１０時？いったい私どれだけ寝てんだろう？正志の言うとおりね！’幸都恵は思った。

「ああ１０時なんだ。随分寝たんだね。」何食わぬ風で顔だけは正志のほうに向けた。

「そうだよ。やっぱお前疲れてるんだなぁ。朝メシどうする？」

「えっ？ああいらない。」

「そうじゃねえよ！作らねぇのか？ってことだよ。」正志の言葉に幸都恵はカチンと来た。

‘いちいちバカな男！高々１回寝たくらいで誰が朝メシなんか作るん？作ってほしけりゃもっとテクつけてから言え・・’と思ったけれど

「あぁ私低血圧だから朝ハン食べないんだぁ・・」と言った。

「そうなんだ・・で、この後どうする？」正志が聞いた。

「ん？帰る」

「えっ帰るの？」

「帰る！」

「なんで？ゆっくりしてけば良いじゃん？」正志は少し寂しげに言った。

「か・え・る」幸都恵ははっきりと言った。

「送って行かねえぞ」
「良いよタクシーで帰るから」
「タクシー？こんな田舎じゃタクシーなんか走ってねぇよ」
マジ？「じゃバスで帰る」
「バスなんか１０年も前からなくなってるわ！」
‘ホント？’「じゃ歩いてく」‘参ったなぁ。送っていくよ。って言わないかなぁ？’幸都恵は少し期待した。田舎の事情にまだ慣れていない幸都恵だった。
「なんかお前怒ってる？」正志が言った。
「なんで？怒ってないよ」
「でもさっきからぶっきらぼうジャン」
「私低血圧だからスロースターターなの！」
「そうなんだ。で、なんかこの後予定あんの？」
「ううん？買い物かなぁ？」
「買い物？何買うの？」
‘やっかましいわぁこの男。なんて言えば気い済むの？？’幸都恵は苛ついた。
「休みの日に１週間分の食事の買出しとかするんだけど・・・」幸都恵は少し強く言った。
「へぇ、お前料理とかすんの？」
「するよ！」幸都恵は此処でもぶっきら棒だった。
‘さっき「メシ作れ」っとか言ったのはどこのどなたでしたっけ？もうおバカ相手に話しすんの疲れたわ。’幸都恵はゆっくりとベッドから起きだすと、部屋中を見回した。
‘あれ？わたし服どうしたっけ？？？ん？もしかしてバスルームに置きっぱなし？’幸都恵は昨夜の記憶を辿った。
「何が得意？」正志が聞いたが、その質問には答えずバスルームのほうに歩いていった。
「お前結構良いプロポーションしてるなぁ！胸も結構あるしなぁ」
正志は満足そうに幸都恵の後をついて来た。

「昨夜はホント良い思い出できたよなぁ」右手をお椀型にしてニギニギとしながら言った。
‘このアホは、また女の裸に興味持ってるよ！まあ若い人間のオスだから、メスに興味持つのは健全な証拠か？もう1回やりたいんだろう？けど無理’幸都恵は心の中で呟いてから
「今頃気づいたのぉ？」素っ気無く返した。
「スリーサイズは？」正志が重ねてきた。
やっかましい男だわ。「９０！９０！９０！」幸都恵は投げやりに答えた。正志はガクッとズッコケポーズをした。
幸都恵が服を着る様子を正志はジッと見ていた。
「お前ブラジャーから着けるんだ。それにそんな前かがみで着けるのかぁ？」
正志は初めて見たらしくとても興味深げだった。
幸都恵は右手のひらを目いっぱい広げて正志の顔を覆うと向こうへ突き帰した。
正志は押されるまま後ずさりした。ぶつぶつ独り言を言いながら戻って行ったので
その間に幸都恵は急いで服を着た。そして無言で部屋に戻りバッグを取ると玄関のほうへ歩き出した。ドアを開けようとした時
「ちょっと待って！」と正志が言った。
‘やったぁ送ってってくれるんだ。’と幸都恵は笑顔で振り返った。
「これ忘れ物」と正志は昨夜の小さな包みを手渡した。
「俺からの大事なプレゼント！忘れるなよ」
「あっありがとう」幸都恵は素っ気無い返事をした。
チェッこれかよ。まあ良いわ。早くここから出たかったんだから、こんなとこに長居するよりはましだわ。と思い幸都恵は正志の部屋を後にした。
ところが外に出てはみたものの、どっちへ行けば良いのかわからなかった。何しろ昨夜は代行だったのだし、夜だったので、記憶が曖昧だった。確かこっちから来たような？と思い角を左折した。歩き

ながら車の音がする度に振り向いた。タクシーを止めるためだった。やっぱ田舎はタクシー来ないなぁ。バス停だってホントないジャン。失敗したかな・・・そうだ千春に電話！・・・？待って・・正志んとこへ泊まった。ってばれちゃうジャン。絶対やだ。と考えながら歩いていると、コンビニエンスストアの看板が目に入った。
店に入り缶ジュースとガムを買って、レジで電話帳を借りようとした。
「どうかしましたか？」店員が声をかけてきたので事情を話すと、「タクシーですか？こちらで呼びましょうか。」と店員が電話してくれた。
「１０分ほどで到着するみたいですよ」と言われ店員に挨拶して店を出た。タクシーは案外早く着いた。行き先を告げると、タクシーは店の駐車場を右折して出た。
えっ？なんで？と思ったが、運転手に聞く勇気が湧かなかった。暫らく行くと、正志のアパートの前を通過した。もしかして私反対方向に歩いてた？
そこから5分ほど走ると、昨日立ち寄ろうとした本屋が見えてきた。あっヨット！と思ったが、止まってくださいとも言えず素通りした。その後また5分程度で幸都恵の部屋の駐車場に到着した。
そろそろここに住んで6ヶ月くらい経つのに・・・考えてみれば会社と部屋の往復ばかりでこの辺りの地理にはとても不案内だったんだ。買い物のついでに少し界隈を車で走ってみよう。と思った。
部屋に戻ったら直ぐにスウェットに着替えた。正志とのやり取りは結構な緊張を強いるようだ。体がだるくて何もやる気が起こらない。テレビを点けてぼんやりしていた。見ているような見ていないような感じで時間が過ぎていった。眠っていたつもりはないのに気づいたら辺りは真っ暗だった。電灯を点けて時計を見たら２０時だった。
「ええ！もうこんな時間？寝てたの？」自分でも驚いた。こんなことってあるのかなぁ？狐につままれたようだ。それはそれとして・・・気持ちを切り替えて、シャワーを浴びようと浴室へ行ってシャワ

ーを浴びた。昨日はあまりに簡単なシャワーだったなぁと少しばかり入念にシャワーを使った。ドライヤーもしっかりかけた。そんな事をしていたらお腹が減ってきた。何か食べようと思った。冷蔵庫をのぞいたが、たいしたものはなく冷凍庫から冷凍したおにぎりを出して解凍し、それとあわせて買い置きのカップ麺で食事をした。インスタントコーヒーを淹れて、飲みながら、正志にもらったプレゼントをあけてみた。
化粧ポーチだった。中がなんだかゴツゴツとしていたのでファスナーをあけてみると、白い封筒が有った。その封筒を開けると鍵とメモが入っていた。
幸都恵へ
誕生日おめでとう
　俺の部屋の合鍵です。いつでも来てください。
　Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｄｅａｒ　ＳＡＴＯＥ
と書いてあった。
その鍵を手に取り、自身の車のキーホルダーに付けた。
暫らくテレビを見ていたが、大して面白い内容でなく退屈してきた。あまり眠くはなかったが、疲れを取ろうと思いベッドに右側を下にして横になった。テレビを消し部屋の電灯を減光した。思い通りに生きるって？あの人はどんな風に生活してるんだろう・・・又そんなことが頭の中をめぐった。
何の結論もないまま眠りに入りそうになっていった。暫くしたら右の頬の辺りを温かいものが伝った。無意識に左手でぬぐった。暗がりで良く見えなかったので部屋を明るくし体を起こして手を見た。それは透明だった。えっ？涙？と思った瞬間、目から涙が溢れて頬を幾筋も伝った。幸都恵にはその理由がわからなかった。近くにあったティッシュで目頭を押さえたが、なかなか涙は止まらなかった。ティッシュが次々と涙でぬれて、何度も交換した。
全部あの吉岡ってオヤジがいけないんだ。あいつのせいで私がこんな思いするんだわ。折角の誕生日を台無しにしやがって。無理矢理

にでも涙の理由を見つけたかった。

第2章（その4）

幸都恵は次の朝8時になったら、ごく自然に目が覚めた。とても爽やかだった。昨夜の涙の出来事など忘れてしまっているように感じられた。

いつもの休日と変わらず、洗濯機をまわしテレビをつけた。冷凍おにぎりとカップ麺で朝食をとった。洗濯物を干し終わると、まもなく10時になり、いつものバラエティが始まった。それを1時間ほど見た後買い物に出かけるため部屋を出た。車に乗ってエンジンをかけようとしたら、ゴミステーションの「鉄くず」の文字が目に飛び込んできた。キーホルダーから鍵を1本取ると車から降りてそのドラム缶に捨てた。正志の部屋の合鍵だ。

行きつけのスーパーに行く前に、車で現地調査をした。プールや神社があった。溜め池もいくつか見かけた。時々車から降りて近くを散策したりした。芝生の公園がありフィールドアスレチックなども設置されていて家族連れなどが遊んでいた。子供のはしゃぐ姿や無邪気な声が聞こえてきた。寛いでいる家族も居た。それを眺めていたら、

‘あの人たちはどんな人生なんだろう？恋愛結婚？それって思い通りの人生だよね！好きな人と結婚したんだものね！結婚か？そう言えばこういう日って吉岡さんはどうしてるのだろう？奥さんや子供は居るのかな？あんな風に家族で出かけたりするのかな？千春はどうしてるかな？デートとかしてるのかな？’

色々な想像が頭の中を巡った。

そうして暫くぼんやりとしているとさわやかな風が頬を撫でた。

こんなにさわやかな風を普段の生活の中で浴びる事ができるなんて・・・

今までの生活では感じた事のない感情だった。・・・だからあの人たちは、あんな風に穏やかに楽しそうに過ごせるのかもしれない？

やっぱりここは都会とは違う「住めば都」と言う言葉が頭に浮かんできた。
もう少しここに居たい言う思いもあったが、反面1人ぼっちという寂しさが湧いてきてしまい、ゆっくりと車に戻った。スーパーで買い物をしてから部屋に戻って夕飯の支度をした。
缶のカクテルを飲みながら食事を始めたが、どうしても気になって仕方ない事が頭の中を占領し始めた。それは
‘私って思い通りに生きてるの？’と言う疑問だった。
最初の頃は「やっぱ1人暮らしだと彼氏とか居た方が充実はしてるんじゃないかな」と思ったけど、正志みたいな人はあんまりドキドキしない。
‘やっぱたまには彼氏の所に行ってご飯作ってあげたり、逆に彼氏が来たりとかさ・・・
正志は何て言うか大人に成りきれてないみたいな？我が儘って言うか自分勝手って言うか。
もう少し優しい人が良いなぁ。‘
家出同然で此処へやって来てしまったけれど、憧れていた1人暮らしってもう少し充実してるのかと思ったのに・・・
「こんな筈じゃなかった・・・」と思うとため息が出た。
そして
思い通りに生きる人生ってどんなだろう？
それは1人暮らしスルだけでは実現しないのかな？
彼氏が居ても正志みたいな男じゃつまらない・・これって我儘なの？
そんなことを考えた。
いずれにしても正志とは少しばかり距離を開けたかった。

第3章

それからと言うもの幸都恵は「思い通りに生きる」とか「人生自由自在」と言ったことを時々考えるようになった。
折に触れて開発室の近くまで行ってみる回数が増えた。開発室近くの談話室にある自動販売機でコーヒーを飲んだりしながら時間を稼いで吉岡が来るのを待ったりした。けれどどうしても声をかける勇気が出なかった。第一声を何にしたら良いのかがわからないからだ。ただただドキドキしながら吉岡を見送るだけだった。

それから暫くしたある日、この日も昼食時間になり幸都恵はいつものように食堂で昼食をとっていた。すると
「そういえば幸都恵！ヨットの話はどうなっちゃったのよ！進めてくれてる？まさか忘れてるんじゃないでしょうね。」と千春が話しかけてきた。幸都恵は急にドキドキし始めた。
息苦しくなり千春に気づかれないように食事を飲み込むふりをして深呼吸した。
「忘れてないよ。ただちょっと予約が一杯でキャンセル待ちにしてるんだけど・・・まだ連絡来なくてさ、もう1回催促してみるね」
我ながら上手い言い訳！でも参っちゃったな。まさか「忘れてました」とは言えないよね。
何とか辻褄を合わせなくちゃと色々展開を考えた。私がヨットの経験者ってことになれば1回くらいは先にやっとかないとまずいよね？予備知識や基本用語位は最低限知ってないとな・・・
と言うよりも、愈々運命の時が来たのだ。
あの吉岡と言う男にどんなことがあっても会わなければならない時が来た事を覚悟した。
遂にその時がやってきてしまった事に胸が高鳴っているのだが、今はその事に気付いていなかった。

どうしても息苦しさがおさまらない。‘どうしよう・・・でも・・・工藤君の話では面倒見の良いオヤジらしいから、そこは上手く頼み込んでみるしかないわね。もう面倒見がどうこうではなく何が何でもヨットを教えてもらうしかない。他に頼れるような知人も無いのだから・・・’と意を決したがどうしても胸の鼓動がおさまらなかった。

仕事中も度々ドキドキした。この日の作業は残業1時間だったのだけれど、なんだか時の経つのがとても遅く感じた。午後6時にようやく待ちに待った終業時刻になった。急ぎ足で開発室のフロアへ行った。

「落ち着け落ち着け」と言い聞かせながら歩いた。

‘遂に来てしまった。’幸都恵は眉間に皺を寄せて覚悟を決めた。

‘けれどもいつもと少し雰囲気が違うようだ。’今日は随分静かだな。誰もいないの？’不思議に思いながら恐る恐る開発室のドアを覗き込んだ。透明ガラスの向こうに女性が1人見えた。‘小池さんだ！’声を出したつもりはなかったのだけれど小池はタイミング良く気配に気づくとドアを開けてくれた。

「あら！何か用？あまり見かけない顔だけど・・」

「あっすいません。突然に・・・」幸都恵は言った。

「今日はね、割とみんな早く終わって、帰ちゃったのよ。あなた千春さん？」

「えっ？？？あっ！いえ石野です。石野幸都恵と言います」

「あっそう。石野さん？どんな用？」

「あのぉ吉岡さんは・・？」

「ああ吉岡君？吉岡君に用事なんだぁ・・・彼なら夜勤だけど何かの相談？」

「あっそうではないんですが・・・夜勤ですかぁ？」

「そう！！！・・・」小池は振りむいて奥のカレンダーを見ながら「先週から夜勤やってるの・・」今度は腕時計に視線を落として

「そうねぇ・・7時半頃来るんじゃないかなぁ。何か言付けなら伝

えておくけど・・」
「あっ、いえ！そんな大した用事じゃないんですけど・・・」
「そう？最近彼に色々と相談に来る人が多くなってきて、吉岡君も大変だなぁ。女性なら今度から私が聞こうかな。なんて話しになってるんだけど、私でよければ聞くけど・・」
「あっ。はいっ！でも・・・」
「そう。ゴメンなさいね。」小池は溜息混じりに言うと不思議そうな顔をして
「やっぱり吉岡君じゃなきゃ駄目なんだぁぁ。彼って凄いんだね。どこが違うのかなぁ？
話してくれれば、かいつまんだ簡単な中身だけでも伝えておくけど・・？？」と言った。けれども
「ありがとうございます。また来ますので・・」幸都恵は遠慮した。
「え～と。あっそうそう石野さんだったわね。メモだけでも残して置くわね、今度こちらから連絡させるわ」と小池は言った。
「どうもお邪魔しました。」幸都恵はそれだけ言うと軽くお辞儀をして開発室を後にした。そして今までのように談話室の自動販売機でカップコーヒーを買って、真ん中のテーブルに座った。
コーヒーを半分程度飲んだ頃になると
「あら、吉岡君を待ってるの？まだ随分時間あるわよ。」小池が近くを通りかかって声をかけてきた。
「はい。これだけ飲んだら帰りますんで・・」幸都恵は答えた。
「そう。じゃ帰るときにここの電灯だけ消してってね。夜勤が来るまでこのフロアは無人になっちゃうからね。お願いします。」小池が言った。
幸都恵は黙って一礼してから腕時計を見た。後４０分程度あった。
それくらいなら待ってみようかな？それでも結構退屈しそうだな。
と周りを見回したら、文庫本が１冊目に入った。
それを手にとってテーブルに戻った。‘雪国か？誰が読んでいるんだろう？’そんなことを思いながら読み始めたが吉岡のことが気に

なって、熟読できなかった。数ページ飛ばしたり、また戻ったりしていた。

吉岡が出勤してきた。

「おはようございます今日は面接の予定ありますんで・・」と吉岡は警備室に声をかけた。

「はい、竹田雅実さん。21時の予約入ってます。お見えになったら連絡します」警備員が返した。

「わかりました。お願いします。」そう返した後、第1会議室に行き、エアコンの設定をしてから、開発室のあるフロアへとエレベーターであがった。ドアが開くと談話室の灯りが見えた。‘誰かいる？’と中をのぞくと女性らしい人が真ん中のテーブルに突っ伏している背中が見えた。‘誰？うちの社員さん？’不思議に思いながら中に入り前のほうに回りこむとカップの飲みかけのコーヒーとその近くに文庫本が置いてあって「雪国」と言うタイトルが見えた。‘へーぇ純文学か？こういうの読んでるんだ偉いなぁ。と思いながら顔を覗きこんだが見かけない顔だった。スースーと微かな寝息が聞こえた。

‘何故こんなところで寝てるんだろう？’そんな事を考えながら起こしてあげようと思い肩をゆすった。

「おうい。お～い。もしもし・・・」誰かに肩を強くゆすられて幸都恵は気が付いた。あれ？どうしてたんだっけ。

幸都恵は目を開けた。

「あっ起きたね」吉岡は声をかけたが幸都恵には聞こえなかった。上体を起こしてキョロキョロと周りを見回した。あっ談話室だ。いつの間にか寝入ってしまっていたんだ。と思った時だ。

「どうしたんですか？こんな所で」吉岡の顔が幸都恵の目の前にあった。

「あっ！吉岡さん！！」幸都恵は慌てて立ち上がった。テーブルの

脚に幸都恵の膝がぶつかった。その勢いでテーブルの上のカップが倒れて中のコーヒーがこぼれた。
「うわあ大変！」吉岡は慌てて奥の流しから雑巾を2，3枚持ってきて、テーブルを拭き始めた。慌てていたのでその雑巾で床まで拭き始めてしまった。
「あの、吉岡さん。私にヨット教えてください」幸都恵は棒立ちのまま言った。
「え？どうしたの急に・・」吉岡は床に這いつくばったまま顔だけ幸都恵に向けて言った。
「あの、私ヨットを習いたいんです！」幸都恵の申し出は正に唐突だった。吉岡はこの娘は寝ぼけてるんだろうと思った。
「そう。ヨットね。わかりました。また連絡します。」と答えながら、立ち上がり雑巾を両手で持って奥の流しの方へ歩き出した。幸都恵がついてきた。
「ああ良いですよ。私が洗っときますから」と幸都恵に声をかけた。
「吉岡さん。私本気なんです」
「そうですか。わかりました。また連絡しますよ」
「あの、ホントに本気なんです！」幸都恵は声を大きくした。
「ところであなた、うちの社員さん？」吉岡は気になっていた事を尋ねた。
「あ。はい、あの石野幸都恵と申します」
「石野さんね。吉岡です。宜しく。」と吉岡は返した。そして
「どうしてヨットなんかやりたいんですか？」と聞いた。
「ええちょっと。まあとにかく教えてください。私急いでるんです。」
「急いでるの。何かわけありですか？」
「あ。はい。あの。直ぐにホントに・・直ぐに教えてください」幸都恵は早口になった。
「参ったなぁ。何か少し知識はありますか。」
「あ。いえ、全然・・・それだとダメですか？」

「ダメではありませんが、ヨットって一言で言っても大きいのもあれば小さいのもあるんですよ。小さいのだったら1人でも操作できるんですが、大きくなると1人じゃ無理です。だから、ヨットを習うと言ってもどんな大きさのを習うのか？でちょっと違うんです」
「簡単なほうで・・」幸都恵の安易な考えに吉岡は苦笑した。
「わかりました。では小さいので良いですね！」
「はい」
「小さいのというと、こんなもんですよ」と吉岡は両手を１m程度開いて見せた。
「それで良いです」幸都恵は即答した。
「ホント？大丈夫？後でこんなはずじゃなかった。なんて後悔しないで下さいよ」念を押す吉岡に対し。
「はい。それはもう大丈夫です」幸都恵は明るい大きな声で答えた。幸都恵の嬉しそうな表情に戸惑いながらも吉岡はスーツの左内ポケットから携帯を取り出して操作した。
「あ。英輔です・・・どうもご無沙汰です。・・・実は急で申し訳ないんだけど・・・」と話し始めた。暫く話したあと、携帯を左肩の辺りに置いて
「石野さん。明後日はあいてますか。というより・・・ちょっと遠いので明日の深夜からになるんですけど・・大丈夫ですか？」と尋ねた。
「はい大丈夫です」幸都恵は大きく頷いた。
「あ。お待たせ。大丈夫だね・・・うん・・・うん・・・そうそう・・えっ？あつ！！会社の同僚！・・・そうだよ！・・・馬鹿言うな！・・・そっちこそ・・・ええ？？・・・
ああそうなんだ！・・・なるほど。・・・わかりました。・・・・・・9時だね。了解です。・・・はいはい、間に合うように行きます。・・・分かってるよ。・・・本当に急なお願いで恐縮です。・・・ありがとう助かります。・・・ああそうだね。わかりました。・・・こちらこそ楽しみにしてます。・・・はい。どもども」

その最中に幸都恵は、この人もモシモシって言わないんだ。などと関係ないことを考えていた。電話を切った吉岡は、携帯と入れ替えにメモ帳を取り出し、ページを1枚破ると、
「エーと、忘れないようにメモ書いておきますね。行き先は神奈川県です。それで、現地に午前9時に着きたいので、こちらを出るのが明後日の早朝3時、というか明日土曜日の深夜27時です。場所は・・ぁぁと・・そうだな、上田駅の温泉口って分かりますか？」と聞いてみた。
幸都恵は「はい」とだけ答えた。
その温泉口の方にホテルがありますから、そこの1階ロビーにいてください。そこが一番わかりやすいと思います」そう言いながら内容をメモに書いた。見かけない顔だから多分Iターンの人だろうと思ったからだ。あまりこの辺の地理には詳しくないだろうが、駅前ならわかってもらえるだろうと考えたのだった。それを手渡した。
「じゃあそういうことでお願いします。これ後で私洗っときますから」と雑巾を指差しながら言った。
「あのぉ」幸都恵が言った。
「まだ何か？」
「あの連絡先は？」
「ああそうか。」
「はい。万一の時のために。」
「ごめんなさい。携帯で良いですよね」と吉岡に言われて幸都恵は携帯を取り出した。
「それ赤外線できます？」吉岡が聞いた。幸都恵は意外だった。ただのオヤジだと思っていた人が赤外線と言うとは思っていなかったので面食らった。
「はい。ええと、ええと」少し手間取った。いつもなら簡単にできるのに・・・
「良いですよ。こちらの番号言いますね。」
「あっはい・ちょっ・ちょっと待ってください」幸都恵はいつにな

くうろたえていた。
ようやく準備ができて
「どうぞ」と言った。お願いしますと言うつもりだったのに。
「０９０－××××－○○○○です。確認のために鳴らしてもらえますか」と吉岡が言った。
暫くして吉岡の携帯が鳴った。
「じゃぁ返しますね」幸都恵の携帯も鳴った。
「これでＯＫですよね。ほかに何か？」
「大丈夫です。ありがとうございました」と幸都恵は右手を差し出した。英輔は幸都恵の顔を見た。笑顔に気づくと状況を理解し握手に応じた。
「じゃぁ気をつけて帰ってください。楽しみにしてますから。お疲れさま・・・・・・
ああそうだ、海の上ですから多少は濡れる事を覚悟しといて下さい。なので、濡れても良い服装と着替えは必ず用意しといてください。あと、動きやすい服装でお願いしますね！」そういうと吉岡は開発室のほうへ行った。
その後姿を見送りながら、工藤君の言うように確かに面倒見の良い人みたいね。しかもすばやい決断と行動力。きっと色々なコネがあるんだろうな。，と幸都恵は少しばかり感心した。しかも今日はスーツを着ている。それだけでなく髪もフワッと柔らかく整えてあった。無精ひげも無い・・・。気づいたら微かにコロンが香っていた。ムスク？ありきたりの香りだったけれど、何故か幸都恵には新鮮に感じられ。頼もしく見えた。最悪だった吉岡の印象が少しばかり好転した出来事だった。
その後、流しの下を探ったらバケツがあったので、そこに湯を入れて、雑巾を漂白した。
吉岡は開発室に向かって歩きながら、少しばかり冷静さを欠いた言動に反省した。

住まいはどこか？程度は確認してから待ち合わせ場所を決めれば良かったかなぁ？と。
でもこんな突然に、正に唐突以外の何物でもない。それこそ思いつきでこんな事を言う娘(こ)は、実はドタキャンするかも知れないし・・・何かの罰ゲームで来たのかもしれない。最近の連中は悪ふざけで何でもする。他人の都合なんて関係ない。
もしそうだったのなら、それはそれで又その時に考えれば良い事かな？と考え直した。
それにしても咄嗟に握手を求めてくるなんて・・・海外生活の経験でもあるのだろうか？
あまり日本では握手の習慣はないのに・・・
そんなことを考えながら開発室に入ると、デスクのパソコンを立ち上げてメールを見た。それから今日のスケジュールを確認し、面接に必要な書類や機材を準備してから、現在進行中のプロジェクトの計画書や進捗報告書に目を通した。一段落して腕時計を見たら２０時５０分。そろそろかな。そう思った時ちょうどデスクの電話が鳴った。
「はい、吉岡です。」
「警備室です。面接の竹田さんお見えになりました。第１会議室にお通ししましたから」
「ありがとうございます。直ぐ参ります」そういうと部屋を出た。
談話室の電灯は消えていた。エレベーターで下りのボタンを押したが、その時エレベーターは２階を１階へ向かって下っていた。「あれ？誰か乗ってるの？」英輔は思った。普通ならどこかの階でとまっているはずだ。
この建物の中はスタッフしかいないので、よほどの事がない限りエレベーターは止まっている筈だからだ。

エレベーターを降りて警備室に向かった。
「お待たせしました。」警備室に顔を出した時、誰かが玄関を出て

行くのが見えた。こんな時間に出入りする人って誰だろう？でも警備員さんが何も言わないから怪しい人ではないのだろう。そんなことを考えていたら
「はい。これ履歴書です。」警備員が手渡した。
「すいません」吉岡は受け取った。
「吉岡さん。いいですなぁ。ピチピチですよ。ピチピチ」
「やだなぁ！！からかわないでくださいよ。僕はそういう趣味ありませんから。」
「だって２５ですよ。うらやましい・・・」
「僕はホモじゃありませんよ」吉岡は笑いながら履歴書を受け取りバインダーに挟むと面接会場の第１会議室へ向かった。（トントン）ドアをノックして開けた瞬間「あっ！」と声を出しそうになった。面接に来ていたのが女性だったからだ。「夜の面接は男性限定のはずだったのに・・・」
「竹田雅実。そうかちょっと男女の区別がつきにくい名前だもんな。何かの手違いか。まぁ明日確認しよう。」あまり沢山のことをこの瞬間に考えている暇はなかった。
「どうぞ」と英輔は右手を差し出しながら竹田に奥側の椅子を勧めたが、
「わたしは、こちらで結構です」と遠慮されたので、吉岡が奥に座った。一応事情を話しておいたほうが良いだろうと思い説明したところ、現在は勤務先に在職中で昼間より夜のほうが都合が良かったので、自分からの希望でやってきた。とのことだった。むしろ会社を休まなくてすむのでありがたいと感謝された。面接の終了が深夜になることを話したが、明日は休みなので問題ないとの回答だった。
「こういう人が来ると夜の面接が増えそうだなぁ。」と思った。
筆記試験が終わったところで、食事をしてもらうプログラムなので竹田を談話室へ案内した。
「すいませんね、夜はこんな飲み物くらいしか用意できないもので

すから」と自動販売機のカップコーヒーを出した。
「ありがとうございます」と竹田が会釈した。
今のうちにさっきの雑巾洗っておこう。と思い、流しへ入ったら雑巾は真っ白に洗濯した上、きちっとしわを伸ばして干してあった。
「あの時出て行ったのは石野さんだったのかぁ。ここまでやるのには随分な時間がかかっただろうな。1時間くらいかけて丁寧に洗ってたんだな。」石野さんという女性の環境に少し興味を持った。「きちんとした育ちをしている女性(ヒト)なんだろうな・・・爬虫類みたいな化粧してるのに・・あれは何か理由があるのだろうか・・・」そんなことを考えていたら彼女に会うのが急に楽しみなってきた。どんな話をしようか？とあれこれ考えてみた。

面接を終え、竹田を送り出した後デスクに戻り、ようやく履歴書を開けた。採否の稟議書に記載するために必要なだけだった。「開発室に女性は小池さんが紅一点だったから、きっと喜んでくれるだろう。」と思った。「このような人材が結構埋もれているのが現実なんだな。」と採用稟議を書き始めた。

第４章　その１

第４章
初めてのデート
ルルルル～ベッドサイドでアラーム音がした。それはモーニングコールだった。夜行に備えて吉岡は待ち合わせのホテルで仮眠していた。
ああもうそんな時間か。歯磨きして、落ち着いて着替えを済ませた後、荷物をまとめて部屋を出た。エレベーターを降り、右に出た。少し遠めの位置にあるソファーに女性が座りその横に少々大きめのボストンバッグを置いてホテルの玄関方向を見つめていた。この時間にここに１人だけいる女性は石野さんくらいだろう。吉岡は迷わずその女性のほうへ向かった。ソファーに浅く腰を下ろし、背筋をピンと伸ばし、脚は心持ち右側へ傾げていた。その脚の置き方は紛れもない英国の淑女のものだった。こういう座り方って・・・又も幸都恵の環境に興味がわいた。
幸都恵はどういうわけか又も心臓がドキドキしていた。
どうしてこんな風にドキドキするのだろう？不思議だった。
彼はどこからどういう風に現れるのかな・・顔を見た時に何て声をかけたら良いのかしら・・などあれこれと考えていた。すると背後から微かに足音のような物音が聞えてきて人の気配がしたので振り向いた。彼だ！心臓は更に高鳴った。無意識に即座に立ち上がると
「おはようございます。」と挨拶の言葉が口をついた。
やはり石野さんだ。顔は相変わらず爬虫類だったので吉岡は苦笑しながら
「随分早いですね。まだ１５分もありますよ」
「タクシーで来たら割と近かったんです」
「そう。ごめんなさい。お待たせしちゃっったんですね。」そういう吉岡に対し

「いえ私も今着いたばかりなんです」と幸都恵は答えた。
「ごめんなさい。今すぐ車回して来ますから、少しだけ待っていただけますか」そういうと吉岡は小走りにフロントへ向かい、部屋の鍵を置くとまもなく幸都恵の視界から消えた。
もしかして泊まってたの？何故？幸都恵の中にそんな疑問がふっと湧いた。すると又理由もなくドキドキし始めた。懸命に落ち着こうとするのだけれど、なんだか落ち着かない気分でそわそわしていた。暫らくすると、玄関のほうから吉岡がやってきて
「ごめんなさい。本当にお待たせしちゃいました。」と言いながら幸都恵のバッグを手に取り
「今日は急だったので、あまり良い車が用意できなくて、むさ苦しいですが、我慢していただけますか。」と歩き出した。
「全然平気です。かえって私のほうこそ突然のお願いで申し訳ありません」と返した。
玄関を出ると１３００ｃｃくらいの車があった。吉岡は
「荷物はリアシートに載せても大丈夫ですか」と聞いてきたので幸都恵は黙ってうなずいた。何も答えられないのだ。吉岡は荷物を載せた後、助手席のドアを開けると、シートの下のレバーを操作して一番後ろまでさげた。吉岡がそのままドアを左手で押さえ、右手を軽く差し出し
「お待たせしました。」と幸都恵の瞳をみた。幸都恵は小さく会釈した。
吉岡のほうへ向き直り、シートに浅く腰を下ろし、右手をシート奥の隅について、腰を引き込み両膝をそろえたまま体をクルッと右へ回転させて乗り込んだ。吉岡に一部始終を見つめられているようで幸都恵は落ち着くことができないでいた。もうずうっと心臓のドキドキがおさまらない。心なしか手が震えていた。
幸都恵がしっかり座ったのをを見届けた吉岡はシートベルトを引っ張り幸都恵の身体に触れないよう注意してバックルへかけた。そのまま２歩下がると「閉めますよ」と声をかけると幸都恵は前を向い

たまま「はい」と返事をした。吉岡はドアを２０ｃｍくらい手前で一旦止めバタッと閉めた。直ぐに運転席へ乗り込むとエンジンをかけ、シートベルトを付けると
「出発しますよ」と幸都恵の顔を見ながら言って車を走らせた。暫らく沈黙が続いた。
幸都恵は緊張していて肩に力が入っていた。今迄何人かの男性とお付き合いしたことはあったけれどシートベルトまで締めてくれるような人は一人もいなかった。あまりにも接近しすぎたせいなのだろうか？リラックスできないでいた。何となく居心地の悪い時間帯だ。
一方の吉岡は全く別なことを考えていた。
「この女性（ヒト）もやはり良い環境の中で育ったんだろう？」と考えていた。今までに幸都恵のように脚をそろえた乗り方をした女性は過去にも何人かいた。最初に見たのは洋子だった筈だ。大抵は育ちの良い淑やかな女性だった。幸都恵の生い立ちや境遇などに興味を持った。けれどそれは付き合いが深まれば自然に分かる事だろうし・・・そこまで深い付き合いになる事はおそらくないのだろう・・・そんなことを考えていて言葉をかけるのを忘れていた。
先に口を開いたのは幸都恵だった。
「あのぅ。私シートベルトくらいは自分でできますから」
「ああごめんなさい。そうですよね」
「もう４回目ですよ！」と幸都恵が言った。
「４回目？」
「そう。『ごめんなさい。』ってさっきからずっと言ってます。」
幸都恵は正確に数えていたわけではないが、すーっと口をついて出た。
「ああごめんなさい。・・・ああ又言っちゃった・・」「あはは」
互いに笑った。
少し緊張がほぐれてきた。
「あとぉ。そのなんとなく丁寧な話し方もやめていただけませんか？」

「丁寧？」
「ええ、殿方があまりそのようなお話しかたをなさると、なんだかわたくし落ちつきませんのよ」幸都恵は意識的に丁寧な言葉でふざけてみたつもりだったのに逆に恥ずかしくなった。普段はこんな話し方はしないからだ。
「そんなに丁寧な話し方でしたか？でもやはり初対面の人だと、可能な限りきれいな日本語で話をしたいな。という思いがあるんですよ・・・」石野さんなんだか怒ってるみたいだな。と吉岡は感じて真面目に答えた。
「方言でしゃべっちゃうと割りとぶっきらぼうに聞こえるみたいですけど・・・」と言いながら何とかこの場を打開しなくては・・・と考えていた。そこで
「それはそうと、石野さん。オイはどこの生まれだい？」と言ってみた。
「え？」
「オイはさぁ、Ｉターンでうちの会社に入ったみてぇだけど、ドコの出身だいや？」
「やっぱ、方言はダメみたいです」幸都恵が言った。
「なんだ。オイが少し期待してるかや、と思ってしゃべってみただけどだめかいなぁ？」
「わあ、やめてぇ！」と幸都恵は両手で耳を塞ぐ仕草をした。
「背筋がゾクゾクします。それと話の内容が理解できません。やっぱり普通に話してください」とお願いした。
それでもその顔は笑っていた。吉岡も笑顔だった。
「聞き慣れないと違和感あるでしょ。ここまで訛って話す人も最近は少なくなりましたけど、やはり標準語と比べたらイントネーションとかも随分違うでしょ」と吉岡は言った。
「僕は結構好きなんですけどね。この訛は・・・
ところで石野さん。実際どちらのご出身ですか？」と吉岡は聞いた。
「さとえです」

「はぁ？」吉岡には意味が分からなかった。
「さ・と・え」
「さとえさんですよね」
「ばあか」幸都恵は笑いながら言った。
「・・・」吉岡は少しの間考えた。
「いしのさとえさんでしょ？名前間違えてますか？」吉岡は尋ねた。
「名前は間違ってないけど、苗字じゃなくて名前で呼んで欲しいって意味です」幸都恵は優しく言った。吉岡は納得した。
「最近の人たちって大体呼び捨てでしたね。でもいきなりそういうのはちょっと難しいので、とりあえず『さとえさん』って事でもよろしいですか・・そうすると僕は『えいすけ』ですかね？」
「でさぁ英輔は昨日スーツ着てたじゃんか？あれなんで？？」幸都恵はぶっきら棒に言った。
いきなりタメグチか？と英輔は思ったが、名前で呼べっていう意味で良かったみたいだ。親近感を持たせるための幸都恵さんの工夫なんだろうな。と良いほうに解釈し、できるだけ緊張を和らげるようにしようと思った。
「ああ、あの時？面接があったもんで・・」
「面接？面接もやってんの。大変！その面接ってどんなことをやるの？」
「んん・・仕事の話は聞いてもあまり楽しくないと思うんだけど・・」
「そうかなぁ・・私結構興味あるなぁ。英輔がどんな仕事してるのか？って。色々なチャンネルを持ってるんでしょ！作業着の時とスーツの時ってチャンネル違うんでしょ？」幸都恵は意識的に無愛想な話し方をした。
「そりゃ違いますね。でもそのチャンネルの話は良くご存知ですね」英輔は言った。
「工藤君から聞きました。」
「ああ工藤君か。仲良しなの？」

「はい。いつも一緒に食事してるんですよ」
「へぇそうなんだ。彼も開発室だからね」
「それで色々と英輔さんのこと教えてもらっちゃいました。多趣味だってことも。その時にヨットの話も聞いたの。」
「それはそれは・・・それで色々って？」
「それよりも、面接の話し聞きたぁい」
「そう？あまり面白くないと思うんだけどなぁ」
「ぜひ聞かせて・・・凄く興味があるの！」幸都恵は千春や工藤たちがどのように選ばれたのか知りたかった。選考基準やその中身などを直接聞くことができるのも、こんな時くらいだから、良い機会だと思っていた。
「わかりました。結構長くなりますよ。それに遠方まで行くんで、退屈だったら遠慮なく寝ちゃってください。」英輔はチラッと幸都恵の顔を見た。幸都恵はうなずいた。
「うちの面接は、まず筆記試験と、後はトーク。」英輔は話はじめた。
「Ｉターンの人は筆記試験は無かったですかね。こちらで採用の人は全員筆記試験があります。」
「どんな問題出るんですか。」
「最初は漢字の読み。これは３０分間で、その後カンニングテストってやつがあるんですよ」
「カンニングテスト？何それ？」幸都恵は聞いたことがなかった。
「まあこれは僕らが独自にそう言ってるだけなんだけど、辞書でも百科事典でも何でも見て良いってことになってるんでカンニングテストって呼んでます。」
「隣の人の答えを見るのはどうなんですか？」
「勿論それもＯＫ」
「やっぱりぃ・・・だからカンニングなんだ。なんでもありってことかな？」
「早い話そう言うこと」

「面白いですね。普通カンニングは反則なのに・・・それって難しいんですか。」幸都恵は更に興味が湧いてきた。
「たとえば、今年の○月○日に○○歳になるタレントのフルネームと趣味を答えなさい。みたいな問題出してます。」
「それって百科事典には載ってないでしょ」
「そうだね。」
「百科事典見ても良いって言われても・・答えが見つからないですね」
「だぁね！だから大体インターネットで検索することになるのかなぁ。」
「え？インターネット？携帯？それともパソコンを持ってくるんですか？」
「さすがにパソコン持ってきてください。とは言えないんで、パソコンが必要ならこちらで用意します。それでワード、エクセル、インターネットへの接続環境等は提供します。みたいな事は事前に話しておいて、それ以外の物は必要に応じて持参してもらう。ってことになります。で、最初の漢字の読みはカンニング禁止。その後少しインタバールを取ってからカンニングテストに入ります。」
「どうして読みはカンニング禁止なんですか？」
「良い質問ですね。我々の日常って、殆どパソコンを使ってるでしょ。そうすると読めるけど書けない。ワープロ病と言うかパソコン病と言うのか、そんな人が増えてるわけ。
最近のビジネス文書ってのは報告書でも何でもほぼ１００％パソコンで作っちゃうでしょ。だから普段文書を作成する時は別に書けなくても問題ないんですよ。例えば手書き文書でも分からない文字があったりした時、幸都恵さん貴女はどうします？」英輔は聞いた。
幸都恵は暫く考えて
「携帯で調べると思います」と答えた。
「そうでしょ。だけど・・・読めないと何種類か出てきた時に選べないしミス変換してしまう。なので最低限読みはきちんとしてほし

い。というわけね。・・・そんな理由からカンニングテストには書き取り問題も出るんですけど、それはビジネス文書の穴埋めで、空白に漢字を書き入れてもらう問題。で・・さっき言ったような検索問題へと続いていくと・・・」
「でもインターネットで検索して、簡単に答えがでるのかなぁ??」幸都恵が言った。
「良くわかってますね！少し捻ってあるのでね・・
『今年の何月何日に何歳になるタレント。』って言われたら生年月日を計算しなきゃならないでしょ。しかもそれが1人とは限らないわけだから、1人だけ回答するのか複数回答するのかとか、仕事上曖昧な指示が出されることって結構あるでしょ。だから多少設問に曖昧さを持たせて、そういう時にどんな風に臨機応変に対応するのかを知りたいんです。それ以外にも検索の文字列の入力の仕方で素早く目的の回答に辿り着く時もあれば、なかなかうまくいかない時もあったりする。そう言う時に頭の回転の速さや柔らかさが試されるんですね。」
「パソコン使えなかったら、どうしようもないですね」幸都恵は言った。
「結局そういう事になっちゃいますね。」
「使えない人は、どうすれば良いんですか?」
「どうすれば良いと思う?」
「・・・どうすれば良いんですか?・・・わからない」
「携帯とかで友人に電話して聞く。って方法もあるにはあるんですけど・・・」
「それってずるいんじゃないですか?」
「そうぉ??基本的な考え方の相違?・・・ちょっと言葉足らずだったかな?
実はテストの前にどのような手段を利用していただいても構いません。この部屋の出入りも自由です。但し終了時刻には回答用紙を持ってこの場にいて下さい。って説明します。なので、何処でどうや

って調べてもらっても良いわけです。極端な話自宅まで持ち帰って家族に回答を聞いてもらっても良いし、事前に設問を知っていて回答を持ち込んでいても問題は無いです。物理的に不可能な話ですけど。」

「ずる賢い人ほど有利にできてるような気がする！」

「そういう風に聞こえちゃうかな？まぁでも、これは結果だけが全てだからね。」

「そんなテストをする理由ってなんなんですか？」幸都恵には理解できなくなっていた。

「結局我々の社会って、結果だけで評価されるでしょう！」

「結果だけで？？そうは思わないけど・・・」幸都恵には不満だった。

「それはもう小さい頃からそういう習慣が身についているから気付かないだけだよ。」

「習慣？そんな習慣ありましたっけ？？」

「「たとえば！学校でねテストがありました。Ａさんは自宅での学習時間ゼロ。Ｂさんは毎日５時間やってます。それで５教科の合計でＡさんは４００点。Ｂさん２００点。どっちが優秀？」

「・・・Ａさん・・・」

「でしょ！Ｂさんは毎日自宅で頑張ってるから、あなたには特別ボーナス２００点あげます。とは誰も言ってくれないでしょ。逆に５時間も何やってるの？って言われちゃう。

ましてやビジネスの社会では尚更。

いくら『私は頑張ってます。』って言っても結果が出なければ、頑張りは認められないでしょ。そう言う意味で言うと『結果だけで評価される』って表現になるんじゃないかな」

「そうなんですか・・・」幸都恵は少し理解した。

「ずる賢いって表現は少々語弊があるけど、頭の回転の早い人が有利にはなるだろうね」

「ですよね」

「だね！なので・・・そう言う回転の早さを知りたいわけね！」
「そう言うことですか・・・そういえば私のところに、何故だかいつも作業が遅れちゃう人がいる！私よりも年下だけど一応先輩だから、あまり色々言えないけど。そういう人って、何が違うんですか？」幸都恵は気になっていた事を口にした。
「作業が遅れる？・・・詳しくは現場を見ないとはっきりは言えないけど・・
まぁそうだな一般論で言うと、そういう人は時間の概念が水平な直線になってるんだと思う」英輔は考えながら言った。
「水平な直線ですか？どういう意味なの？」幸都恵には理解できなかった。
「そう。これは、ちょっと難しいよね。・・・後で詳しく話すとして一旦ここで話を元に戻そうか！それで、えーと・・・結果が全てって話でしたよね。でもそこはやはり押さえドコというのがあって。その辺ははトークの時間に確認します。」英輔は言った。
「トーク？？」
「簡単に言うと雑談！」
「雑談？面接でですか？」幸都恵には理解できなかった。
「どんな話をするんですか？」幸都恵は尋ねた。
「色々、趣味の話だとか、特技とか・・・」
「ええ？やっぱり雑談？そんなんで何かわかっちゃうことってあるんですか？」
「何がわかるか？って言われるとちょっと難しいけど、感性を知りたいんですね。ＥＱってあるでしょ！」
「心の知能指数だ！」幸都恵は咄嗟に言った。
「そう。さすが良く知ってますね。本読んだ？」
「少しだけ」幸都恵は左手で少しという合図を作った。
「細かい話をすると感性とＥＱは別物だと思うけど、感性の話をする時はＥＱって言ったほうが受けが良いもんでね・・・」英輔はそう言ってから続けた。

「機械を使いこなすってのは慣れてしまえば、ある程度のレベルまでなら誰でもできるようになるんだけど、そこがさっきも言ったように検索の文字列にどんな言葉を入れるか？ってところでアウトプットが違ってくる。その入力の部分にその人の感性が現れるから、単純に機械に慣れていて速いのか、頭の回転を使って速いのか？をトークを使って見極めていく。」

「感性ってそんなに重要なんですか」「感性の間に受けるって文字を入れるとどうなる？」

「感受性？」

「でしょ。感性とはモノを感じ取る心なわけです。その感性が豊かでないと、発想が貧困になってしまう。色々な場面で、ここで何かを考えようと思っても、何も浮かんで来ないわけ」

「・・・そうかなぁ。ちょっと難しい」英輔の話は展開が速いので幸都恵がついていくのは大変だった。

「これくらいにしときますか？」退屈してきたかなと英輔は思った。

「いえ。そういう意味じゃないです。続けてください。」幸都恵はもう少し聞いていけば理解できるかも知れないと思ったので言った。

「大丈夫？」英輔は確認した。

「はい」

「そう。これはね、今の職場じゃないんだけど、前の会社の話だけど、趣味がガラス細工集めって女性社員がいたんだ。

どういう趣味か？って言うと。そのガラス細工には色々な色や形をした物があるんだけど、それを窓際に並べてね、光の当たり方で変化する輝きを楽しんでいる。って言うんだ。

日によって太陽光の強さも違えば季節の移り変わりで差し込む角度も違う。そういった違いで輝き方が違う。それを見ていると落ち着いた気持ちになります。と言うんだ。

この話を聞いたときは背筋がぞくっとした。すごい感動だったなぁ。

これが感性！僕の中では感性を語るときの一番のエピソードだな。

あまり他人には話したこと無いけど。

それで、その彼女に
すばらしい趣味ですね。それは貴女の感性が豊かだからです。その感性は貴女の財産だから大切にしてください。って言ったんだけど。彼女曰く
『そうですか？前の支店長にはくだらない趣味だ。って言われちゃいましたよ』って言うんだ。それは前の支店長に感性が無かっただけだよ。って話したけど、かわいそうな話でしょ。
感性って言うのは、お互いが豊かでないとそういう話になっちゃうんだ。だから受け取るほうも豊かな感性を持ってないといけないんだね。
そのあと、その彼女には何かチャンスを上げようと思って、仕事を見つけてやってもらったら良い仕事したなぁ。それ以来、感性は絶対に必要だって確信してる。」
「へーぇそうなんですか。けどどうしてそんなに感性にこだわるのか。が良く分からないんですけど」幸都恵が言った。
「今の時代ってＩＱなんて大差ない。それもだけれど今の日本の教育のあり方ってのはどうしても記憶力の勝負。これはここ何十年もあまり変化無い。だから筆記試験だけで選別しようとしても最初から無理なんだ。
それで、じゃ一体ドコで差をつけるか？といえばＥＱなんだ。
漢字は最低限のレベルで必要だけど、それとて最近はヲタクとやらが居るから、読めるだけで即合格とはいかない。
「ヲタク？」幸都恵には意味が分からなかった。
「ほら漢字検定ヲタクって言うアレ。マニアってやつね！だから漢字だけ知っててもねぇ。
それからあれこれ沢山の知識があれば良いかというと、それもやはりトリビア的な部分があって無駄に知識があってもダメなんだ。
前にも言ったけど知識や情報はいつでもドコでも手に入れやすくなっているから、ドコで入手すれば良いかを知ってさえ居れば全く問題ない。本当に必要なのは入手した情報や知識をどのように加工し

てどう活用していくか？なんだ。
それにはどうしても感性の豊かさが必要不可欠になるんだよね」
「やっぱりもうひとつすっきりしないですね」幸都恵は少々消化不良だった。
「さっきも言ったようにＩＱは記憶の領域なんだ。テストで良い点が取れる人はつまりは記憶力の良い人なんだ。これはこれで大事な事なんだけどね。
昔、『詰め込み教育』なんて言葉があったけど、習った事を覚えてさえ居ればとりあえずなんとかなるんだよね。
でも感性っていうのは、記憶の良し悪しとはあまり関係が無い。心の動きだからね。だから心の知能指数って言って《心》って文字が付く訳だ。
それでね。色々と質問していくと、面白い事にＩＱが高いだけの人は、同じ質問に同じように答えてくるんだよ。これを僕は個人的に優等生的な回答って呼んでるんだ。」
「どんな回答ですか？」
「簡単に言えば、模範解答だよね。一般論っていうか？オリジナリティーのない、前もって予想されたことを答えてくるよね」
「オリジナリティがない？」幸都恵は独り言のように言ってから
「それって、どんな時の事なんですか？」その後尋ねた。
「そうだなぁ・・・この会社を希望した動機。とか・・・
そうすると『貴社の将来性。』とか答えてくるわけね。
何を見て将来性を判断してるんですか？って突っ込むわけよ。
そうすると大抵『うーん・・』って考え込むよね。
そりゃそうさ、将来性を判断するような材料なんて殆ど皆無に等しい。
５年１０年ってスパンで情報をを収集してきて材料が揃ってるならまだしも・・・
優等生は結局教科書通りの答えしか持ってないんだ。
ああそうそう、これも前の会社での出来事だけど、１９歳の女性が

ね。『○○さんは1部上場ですよね。』って言ったんだ。イクラでした？って聞いたら。ちゃんと答えたね。
「イクラって？？」幸都恵は聞いた。英輔の話は時々分からない部分があった。
ああ、株価だよ！『昨日は○○円でしたよ』って、新聞見たのかもしれないけど・・こういう回答が面白いわけね。そこから色々更に突っ込んでいくことになるわけ。ただの株式ヲタクじゃないかどうかをね。」
「へーぇ」幸都恵には新鮮な情報だった。
「更にどんな事を聞くんですか？」
「前の会社の長所と短所。後は違和感を覚えた習慣、企業の体質や風土。そんなことを聞くよね」
「面接ってそういう事を聞くんですか？私はあまり面接って受けた事がないんですけど・・普通はあまりそう言うこと聞かないような気がするけど・・・何故やめたんですか？とか、聞かないんですか？」幸都恵は訊ねてみた。
「ケースバイケースだね」
「ケースバイケース？聞く時と聞かない時があると？・・・それって何パーセント位聞きますか？」
「う～ん」英輔は少し考えてから「２０％くらいかな」と答えた。
「ええ？！！？絶対にそれは聞かれると思ってましたけど」幸都恵には意外だった。
「そっかぁ。まあ一般的には聞くのかな？でも・・・俺は聞かない」
「なんでですか？どうして聞かないんですか」幸都恵には興味のあるポイントだった。
「だって前向きな気持ちで居たらやめようなんて思わないでしょ。後ろ向きな気持ちになったからやめたんだからね。
だから、どうして辞めたか？って聞いても大抵は優等生的な回答になってしまうんだ。
ネガティブな回答は聞くほうが好まない事は殆ど誰でも承知してる

でしょ！だから本音はあまり出てこない。ぶっちゃけ上司の悪口は言えないし・・・
ならばそれよりもその会社の長所や短所とか違和感ある部分とかを聞いたほうが実のある回答を得られるってわけ、それをちゃんと答えてくれれば十分に分かるでしょ。つまりそういう事をきちんと答えられる人は自分の会社を客観的に見ていたって事なんだからさ。」
「確かにそうかも知れませんね。面白いですね。それを聞く時ってどんな時ですか」幸都恵はさらに突っ込んだ。
「殆ど聞くね！９割ぐらいは。辞めた理由を聞く時は迷った時だな。採用するかしないか。これと言ったはっきりした決め手が無い時かな？」
「それを聞くと決め手になるんですか？」幸都恵はどんどん興味がでてきたが英輔は少し面倒に感じてきていた、ちょうど横川ＳＡの標識が見えてきた。
「少し休んで良いですか？」と英輔は聞いた。
「ええ。どうぞ」幸都恵の答えを聞き、英輔は左にウィンカーを出し車をＳＡに入れた。
先に車を降りた英輔は、助手席のドアを開けた。
「私は別に・・・」と幸都恵の答えに
「定期的に少しでも体を動かしたほうが良いですよ。エコノミークラス症候群にならないようにしないとね」と言いながら幸都恵のシートベルトをはずした。
「そうですね」と幸都恵も降りたが、それって飛行機での話じゃないの？と思った。
「一応要所要所では止まりますが、必要なくてもとりあえずメイク直しとか・・・僕はトイレに行ってきます。」と英輔はトレイに向かったが、あまり上手な言葉じゃなかったかな。でも用足しとか、あまりストレートには言えないし、こう言う時ってなんて言えばベストなのかなぁ？と考えていた。
幸都恵が化粧室から出てくると、英輔はサービスエリアの自動販売

機の所に居て、幸都恵に気づくと手招きをした。
「何か飲む？」と聞かれたけれど
「今は別に・・・」と答えた。英輔は幸都恵の言葉を無視して
「緑茶、紅茶、コーヒー、その他・・・車って意外に咽喉渇くよ！
とりあえず缶でも買っといたほうが良いよ」
「いえホントに・・」
「そう。わかりました。」とペットボトルのレモンティーを2本買った。
幸都恵が外へ出たので英輔もそれに続いた。外で少し屈伸などしてから、再び車に乗った。
走り出してから直ぐに
「そうそう」と英輔は幸都恵に1枚の紙切れを渡した。そこには
○―――国境のトンネルを抜けたら雪国になった。―――
―――この書き出しで始まる小説のタイトルと作者を答えなさい。
―――
と書かれていた。
幸都恵は
「エーとこれって雪国ぃ？」と自信無さそうに言った。
「そうそう、読んでたでしょこの間・・・でも・・・ちょっと違うんだよな。」
「違う？違うってどう違うんですか？」幸都恵は聞いた。
「読んでたけど忘れたかな？」
「そうですね・・・」英輔にそう言われたが
「でも・・トンネルを抜けたら雪国だったんだから、やっぱり雪国じゃないんですか？」幸都恵には英輔の意図がわからなかった。
それにあの時は只の暇つぶしにペラペラめくってただけ、それに熟読できなかったし・・けれどそれは言い訳になるから言わなかった。
「そう。そこが実はとても重要な部分でね！これって原文に忠実な書かれ方をしていないんだ。それで今貴女が言ったように『トンネル』と『抜ける』って言うのと『雪国』って言うフレーズだけでそ

う判断するケースって意外に多いんだよ。でもそこで・・・待てよって考えて原文を調べて『原文と違いますね。雪国みたいだけどちょっと違います』って言ってもらいたいんだよ」
「原文はどうなってましたっけ？」幸都恵は聞いたが
「うん、後で調べてみて」英輔は素っ気なく言い続けた。
「実はね。答えあわせと称してこういう所で、そのプロセスを確認するんだ。」
「プロセスですか？さっき結果が全てって言ってましたよね！」幸都恵は又分からなくなった。
「そうだったね。勿論結果が全てだけど。その結果を引き出すプロセスがどうなっているか？こういう所でしっかり確認しておかないといけないんだ。
原文は知らずキーワードだけ知っていた。原文を知ってるのにさっきのキーワードだけで判断してしまった。なんだか変だな？と思ったけど多分これだろうと回答してしまった。とか。或いは全く知らないので適当に回答した。しっかり調べて正しい文に書き直して回答する。この一見単純な設問なのに色々な分岐点があるんだ。
ところが日本人って割とこう言う時って設問は間違ってないという前提で回答する人の率が結構高い。『分からない』って答えもこの場合一応正解なので、それが偶然かどうかを確認したいんだ。
つまり、こう言う分岐点でどういう行動を取るかでその人の性格が分かってくる。
うっかり屋、早とちり、慎重派とかね。折角道具を与えられてるのにそれを活用しようとしない人も多い。
だから雑談形式で話をしていくんだ。すると割と打ち解けてきて本音を話し易くなる。
こうする事によってそのプロセスと結果との合理性も確認できるし、たとえ回答が正解でなくても合理性があれば問題無いんだ。そう言った事を引き出したい。」
「分かったような分からないような・・・」幸都恵には少し難しく

なってきて思わず欠伸が出た。それを合図に英輔は
「そろそろ少し寝といた方が良いよ。この後結構疲れるはずだから」
と英輔はすすめたが
「さっきの続きをもう少し聞きたいんですけど・・・」と幸都恵は言った。
欠伸を見られてしまって少し申し訳ないような気がしたからだが
「そう？面白いかな？こんな話」と英輔は返した。
「結構面白いです。ためになるし・・・」
「まあ、そんな話をする機会は又いずれあると思うので、とりあえずここはそろそろ寝てったほうが良いよ」と強く言った。
「わかりました。じゃ失礼して・・・」と幸都恵は目を閉じた。少しほっとしたのだ。
「シート倒したほうが楽だよ」と英輔。
「そうですね」と幸都恵は少しリクライニングさせた。
「英輔さんは、車で歌とか何か音楽聴かないんですか？」と幸都恵がたずねた。
「そうだね。すっかり話しに夢中で忘れてた。カセットしかないけど良いかな」とカセットを入れた。女性歌手の曲が流れてきた。
「ＥＶＥＲＹＴＨＩＮＧですね」と幸都恵は曲のタイトルを言った。
「こういうのじゃダメ？」
「いえ。意外だったんで。英輔さんはそういうイメージじゃなかったから、でもこれカセットですよね」
「そう、今時ＣＤ付いてない車ってありえないでしょ・・・この車はほら通勤車だから、別に必要ない。家でダビングしたのを聴いてるんだよ。かなり古典的なことしてるでしょ。テレビドラマの主題歌だったんだよこの曲。歌詞がドラマのセリフにもなっててね。今まで生涯で一番好きになった歌だなぁ」
「へぇ。そういう歌ってあるんですね」
「そうなんだよ。ところで僕ってどういうイメージ？」
「・・どっちかって言うと男の曲を聴いてるみたいな。ほらヨット

もだけどゴルフとかスキーもやるんでしょ。だから意外にスポーツマン？多趣味だとかって・・・」幸都恵は少し嘘を言った。実際には演歌のイメージだったからだ。でもこの曲から演歌ではイメージが離れすぎてると思ったので、こんなことを言ったのだ。

「それもやっぱり工藤君から聞いた？意外なんだよね、僕は。」吉岡は嬉しそうだった。

「そう言えば、ゴルフって楽しいですか？」幸都恵は聞きたかった事を聞いた。

「そろそろ寝ないと。そんなに話してると、寝る時間が無くなっちゃうよ」と英輔は遮った。あまり今はゴルフの話をしたくなかった。

「寝る！」と幸都恵は素っ気無く言うと目を瞑った。英輔は音楽のヴォリュームを少し絞った。その後幸都恵は眠くならなかったけれど、目を開けなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8391t/

ライフデザイン

2011年11月6日17時11分発行